
天孫降臨

針鼠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天孫降臨

【Nコード】

N4850C

【作者名】

針鼠

【あらすじ】

三種の神器を手にするとき三国の王になるだろう。神に魅入られし少女まぼろは、神に魅入られているにもかかわらず神を否定し、神に愛されし少年ミクニは、神に愛されているにもかかわらず死を望んだ。二つの魂が出会うとき世界は変わる。

プロローグ

漆黒の闇だとゆうのに赤々と大地は燃えていた。

火の手から一里ほど離れた森に二つの影がひっそりとその光景を見つめている。

赤々と天を照らす魔性の光――それは美しくそれでいて惹きつけられるものがある――だが近づけば身を破滅に導くであろう破滅的な美しさ――

二つの影は、その魔性の光を睨むようにして立っていた。

それは、一頭の雄々しい立派な角を持った白鹿と小さな老婆――

白鹿は、悲しそうに鳴いたかと思うと口を訊いた。

「おのれ大帝め、やりおったな……」

その声音は、悲しみを含んでいるようにも聞こえるが、白鹿の双方の目には憎しみと軽蔑の光がらんと輝いていた。

老婆は、白鹿をなだめるように優しく撫でた。

「カジカや、身を鎮めなされ。荒れ狂う眼のままでは真実は見えませんぞ」

白鹿は、頷いた。

「天津神の時代は終わりつつあるのじゃ、カジカ……これからこの中つ国の三つの国は一つにならなければ……今こそ我らの中つ国の王を見出さなければ……」

「では・・・おおしろの婆・・・」

白鹿は、息のみ老婆を見つめた。

「新たな時代が、始まるのじゃ

心せよ、カジカ。

三種の神器の正統な後継者を探すのじゃ。」

白鹿は、頷くと老婆に頭を垂れそして、また高く鳴いて地面を蹴つて闇の中へと駆けていった。

第二話

いつの間に寝てしまったのだろう。

少女は、身を起こし辺りを見渡した。

足音が聞こえて少女は足音の主を見つめた。

女だ。女が、手に収穫したばかりの野菜を抱えて少女に笑いかけた。

「まぼろ、起きたんですね」

まぼろと呼ばれた少女は、膨れて言った。

「かかさま、何故起こしてはくれなかったの？起こしてくれなくて
は困るわ。夕餉までにやらなくてはならないことが山ほどあるのよ」

まぼろは、暫し剥れていたが母の後ろに見知らぬ青年を見つけると
顔を赤くしながら母に聞いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ かかさま、この方は？」

「まあ、別れる時にはあんなに悲しんでいたのに。忘れてしまった
の？」

まぼろは、目を凝らして見つめた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ やたか？・・・・・・・・ やたかなの？」

青年は、人当たりのよさそうな笑顔をまぼろに向けた。

「まぼろ、久しぶりだね。」

やたかは、まぼろと血は繋がってはいないが兄弟のように育った。

戦で親を無くしみなしごだったやたかを里長であるまぼろの父、や
まとが引き取ったのだった。やたかは、まぼろにとって兄であり、
里の中でも最もけんかの強いおのこだった。懐かしい――

やたかが、都一といわれる大工の所に奉公にでてからはもう久しく
会っていない。

やたかは、背が伸びて男らしくなった。だが、健康に焼けた肌や、
好奇心旺盛なきらきらと光る目は昔のまま。まぼろは少し安心した。

やたかが、急に知らない人のように思えてしまったからだ。まぼろが、あまりにも熱心に見るのでやたかは、少し恥ずかしそうに頭を掻くと、まぼろは変わっていないなと言った。

まぼろは、不服だったが、ねねは、笑みを漏らした。

「やたかはね、里の祭りの神殿を作るために帰ってきてくれたのよ」

「親方が、認めてくれたんだ。神殿が完成したら少し祭りを見物して都へ帰るけどな」

それを聞いたまぼろはおおいに喜んだ。

「じゃあ、神に奉納する乙女の舞を見ることが出来るわね、今年は私が神殿で舞うのよ」

まぼろは、自分の膝にあった美しい衣を見せた。乙女の舞の衣装は自分で縫うのだがまぼろは昔から裁縫は得意では無かった、そのため徹夜が続き昼から転寝をしてしまいそのため衣装作りはまったく進んでいなかった。やたかは、感心してまぼろを見た。

「まぼろは、器量がいいからな。楽しみだ」

まぼろは、嬉しくなった。

「やたか、ととさまにはもう会った？」

「いや、やまとさまにはお会いしていない」

「やたかが、立派になった姿を見てやまとさまもさぞや、お喜びになるでしょうね」

ねねは、とても嬉しそうだった。

しばらく話をしてやたかは、神殿作りのため仕事に戻っていった。

ねねは、やたかを夕餉に呼んだ。

夕餉では、本当に楽しい時間を過ごした。

里長やまとは、やたかを実の息子のように愛していたので、やたかが、無事戻ってきたことを大変喜んだ。

まぼろは、やたかに都のことをいろいろ聞いた。やたかは、まぼろの質問に丁寧に答えてくれた。

ねねは、まぼろを連れて奥へ下がった。話題が、戦のことや大帝のことになったからだ。まぼろは、聞いたかったが母はやたかと

やまとの二人だけにしたいと言ったのでまぼろは仕方なく下がった。

「大帝は、戦をまたするそうだな」

やたかが、頷いたので、やまとは、苦いものを飲むような顔をした。
「兵が、都に溢れておりましたので間違いないと思います」

「今年も、都の使者が祭りの祝詞を行う事になっておる」

その折に、障りの無いように聞いてみるつもりだ。と里長は言った。
「それにこの里には八咫の鏡がある、いかに大帝とて神の聖域で戦をしようとは思うまい」

頷くやたかを見ながらやまとは些か張りのある声で言った。

「やたか、わしは誇りに思うぞ。立派な若者となったお前はわしの自慢の息子だ」

「これもすべてやまとさまのお陰にございます」

やたかは、深々と頭を下げた。

「決心したんだな」

やまとは腕をくんだ。

「わしは、お前に里長を押し付けるつもりはない、お前は、お前らしく生きればよい」

やたかは、顔を上げた。その顔は、もうあの幼いやたかでは無かった。

蠟燭の炎がゆらゆらと揺らめく。

それから、やまとはやたかと酒を酌み交わした。やまとは、酒を存分に楽しみついに歌い始めた。

やたかが、やっと上機嫌のやまとから開放されたのはねねが止めに入ったからだった。

「やたか、こつちよ」

まぼろは、やたかを見張り台まで呼んだ。ここのなら、美しい夜空

も見えるし誰にも邪魔をされずにやたかと話ができる。

梯子を上ってきたやたかにまぼろは手を差し伸べた。掴んだやたかの手は大きくまぼろの手は幾分小さく見えた。まぼろは、急に恥ずかしくなりやたかの手を離し顔を背けた。見張り台から見る夜空は美しかった。

まぼろは、やたかの居なかった時間を埋めるように自分の事を話した。

やたかが、里から居なくなってからいろいろな事が起きた。

泳げるようになりたくて川で練習をしていたら溺れていると勘違いされて助けだされたこと。

狩から帰ってきた里男達が言っていた大熊を見たくて一人で山に入り夜になっても帰らないまぼろを心配して里中の男衆が探しに来たこと。

やたかはただ耳を傾け時折笑みを見せた。

「私、やたかが行つてしまつて寂しかったんだわ」

半身が、切り離されたような気がした。どんな時でも一緒だったせいだろう。

やたかを見ると笑つてはいるが瞳は悲しそうに揺れていた。

「まぼろ、俺はお前を本当の家族のように思う」

「急に何を言っているの？やたか」

まぼろは、笑った。

だが、やたかが真剣な顔をしているので、まぼろは笑顔を引っ込めた。

「誰にも話さないつもりだったが、やはりお前には話したほうがいいと思う」

まぼろは、じつとやたかの目を見つめていた。

「俺は、もう里には帰らない」

「やたか……」

どうして……？とは聞けなかったやたかはきつと答えてはくれないだろう。

もうやたかは里には来ない。心の中で何度も響いて悲しい音色を奏でる。

「昔はよくここに登って遊んだね」

まぼろは、やたかの目を見れずに言った。

「ああ、でもその後でみつちりやまとさまに叱られたがな」

まぼろはやたかは、笑った。そう、あの頃は本当にまぼろは手のつけられない子供だった。それに引き換えやたかは、大人よりしっかりしていると言われるほどの子供だった。いつもまぼろの傍にいたのはやたかだった。

いたずらをするときも、寝るときも、風邪を引くのも一緒だったくらいだ。

やたかが都に奉公に出てからまるで心が引き裂かれるような思いだった。

だからこの先も……ずっとこの里にいてほしい。そう言いたいがまぼろには、里には帰らないと言うやたかを引き止められる自信がなかった。

やたかには、ときどきまぼろとは違う何か異様なものを感じた。まったく別の世界を歩んでいるようなそんな空気をもつことがあった。だから、まぼろがどんなにやたかと一緒にいたくとも絶対叶うはずがないとまぼろは知っていた。

笑うやたかを見てまたそんな淡い願いが浮かんた自分を戒めるようにまぼろは唇を噛み締めた。

「やたか、私も貴方のこと本当の家族のように思っているわ。だから、私のこと忘れないで……里を出てもきつとよ。」

やたかは、頷いた。泣きはしないもうまぼろは小さな子供ではないのだ。やたかと、分かれたあの日からまぼろは驚くべき速さで大きくなった。

「まぼろは、きっともう泣かないと思った」

夜空には、幾千もの星が輝いている。

第三話

着々と神殿は出来ていった。里娘達は乙女の舞のための衣装を縫いまぼろもちろん夜も寝るのを惜しみ縫い続けとうとう仕上げた。娘達は、祭りが近づくことに湧き立ち美しくなった。

都から僧を迎えとうとう祭りは、行われた。

「まあ、綺麗よ。まぼろ……」

母ねねは、感嘆した。白い透き通るような衣を纏ったまぼろは、若さが溢れ美しかった。

黒い大きな瞳は、何処までも澄んでいる。纏めずおろした腰まである髪は、艶があり白い肌に射す赤い頬はまぼろの美しさを引き立てた。

まぼろは、満足そうに笑った。

「かかさま、ありがとう。」

ねねは、まぼろを優しく抱き寄せた。ああ、かかさま。私、かかさまが大好きよ。母は、香を焚いたのかよい香りがする。

「まぼろや、お前がいい子に育ってくれて本当に嬉しいわ。後は良き夫を迎えられれば私はもう思い残すことはないわ。」

まぼろは、笑った。乙女の舞は本来は神に奉げるものだが里娘達が、里男達に思いを伝えるという意味もある。

だから、娘達は着飾り思いを伝えたい相手に髪飾りの花を贈る。だが、まぼろは思いを伝えたい相手なんていないのだ。

かかさま、私そんな気にはならないわ。誰かを永遠に愛するなんて……一緒にいるなんて……できないわ。まぼろは、心の中で母に詫びた。

「かかさま、少し外を見てきたいわ。」

ねねは、まぼろの髪を撫でると行つてらっしゃいな。と言った。

里に、淡い炎が灯されて夜を迎えようとしている空を照らした。

まぼろは、里の重役に囲まれている父を見
つけ近くまで走り寄った。

やまとは、まぼろを見ると目を細くした。

「まぼろ、よく似合っているよ」

まぼろは、につこりと笑った。

里の重役達もまぼろを褒めたのでまぼろは、ますます気を良くした。
出来上がった神殿に都の僧たちが祈りを奉げている。神殿には、八
咫の鏡が恭しく飾られている。

まぼろは、炎にきらきらと反射する八咫の鏡を見つめた。

遠い昔の神話が鏡の奥底から溢れ出てくるような気がしてまぼろの
心は好奇心で震えた。

里爺が言っていた。神道を疑ってはならない。信仰を失えばそれは
神を失うということだ。

だから、この祭りも浄明正直を心に刻まなければならない。

この中つ国でも、信仰を失った哀れな人々が溢れていると里爺は嘆
いた。

だから、まぼろも曇りの無い心で神に仕えなければならないのだ。

まぼろを呼ぶ娘達の声が聞こえる。まぼろは、その声に答えた。

「早く行ってあげなさい」

やまとが、まぼろを急かすとまぼろは里の重役達にお辞儀をし父に
別れを告げた。

つと生暖かい風がとおり過ぎた。

やまとは、眉を上げた。

おかしい、いつもなら梟が鳴いているのが聞こえるはずなのに一鳴
きも聞こえない。それに木々の葉の擦れる音も聞こえない。今夜の、
山は静か過ぎる。

「やまとさま？どうかありませんか」

黙り込んだやまとを重役達は気遣う様子で見つめた。

「いや、たいしたことではないんだ」

そう、気にすることではない。やまとは、やまとは微かな不安を消すように笑った。

第四話

まぼろを囲むようにして歩く里娘達は、まるで別人のように美しくなっていた。

娘達は、頬を赤く染め上げて夫にしたい里男達の名を挙げていく。

まぼろは、飽きれて言った。

「神のために奉げる舞よ。里の男の子達に奉げる訳ではないわ」

娘達は、笑った。

「里爺さまみたいな事言わないでよ。まぼろ、本当にいるかお分かりにならない天津神さまより里の男の子に舞を奉げたほうがいいと思うわ」

「里の男の子より天津神さまよ!!」

まぼろは、即座に答えた。里娘達は、哀れむように言った。

「それに本当にいたとしても、この中つ国にはいないわ。だって天津神は高天原にお帰りになってしまったのだもの」

「でも、高天原におらっしゃるわ。今夜の私達の舞をきくと見てくださるわ」

まぼろは、負けじと言い返した。

「まあ、まぼろにも舞を見て貰いたい人ぐらいいるんじゃない?」娘達はくすくす笑っている。まぼろは、憤慨した。

「一体それは誰なのかしら? 教えて貰いたいわ」

「とぼけても分かっているわよ。やたかでしょう?」

まぼろは、笑った。

里娘達は、まぼろが可笑しくなったと心配して顔を見合わせた。

「残念だけどの違いもいいところだわ。やたかは、もうこの里には帰る気がないんですって」

数人の娘達が、まぼろのその言葉を聞いて肩を落した。

「私は、一人で父の跡を継ぐつもり。だから、夫はいらないわ」

「跡継ぎは？どうするつもりなの？」

「里の誰かに継いで貰えばいいわ」

娘達は、信じられないという顔をした。

「おーうい、僧侶さまがお待ちだぞう。早くしろ」

里爺が呼んでいる。儀式をするのになかなかやって来ない娘達に痺れを切らして大声で呼んでいる。

娘達は、はきはきとした張りのある声で返事をした。

神殿で舞う前に身を清めなければならぬ。都から来た僧に身を清める儀式をしてもらった後やっとまぼろ達は、神殿で舞うことが出来るのだ。

まぼろも、返事をして里娘達と里爺のところへ行こうとしたが森の濃厚な闇に目を止めた。

真っ暗な森の中で、火の玉がゆらゆらと揺れている。

まぼろは、どきりとしてじっと見つめた。

火の玉ではない、松明だ。でも、誰だろう？こんな夜に出かけるのは。

まぼろは、その松明の炎に目が逸らせなくなっていた。何故なら、その松明を持って森の中を歩いているのはやたかだったからだ。

「………間違いないわ、やたかだ。でも何故、こんな夜に山に入るんだろう。」

夜の山は、大人でも入ろうとしない。いくらやたかが、大きくなつたとはいえ松明一本で山の中へ入るのは無謀といえよう。

まぼろは、森の中へと足を進めた。闇が、まぼろを包み込みこむ。やたかの松明の燃える炎だけがちらちらと燃えている。急に心細くなつてちらりと、里娘達を一瞥する。皆を呼ぶべきだろうか。

だが今、やたかを追いかねなければ永遠にやたかに会えないようなそんな気がする。里の者を呼べばやたかが消えそうな気がする。娘達はどうか、まぼろが居なくなつたことに気がついていないようだ。松明は、どんどんと離れていく。まぼろは、意を決すると松明を追つて濃厚な闇を駆けた。

第五話

どのくらい歩いただろう？暗闇の中歩き続けたため時間の感覚が無い。

松明は、どんどん進んでいくというのにまぼろは、息が上がってしまい立ち止まった。

まるで底なし沼の中を歩くような気分だわ。

まぼろは、木々の間から微かに見える月を見つめた。

そつえば、私は何故こんな暗闇の中を躓かずに歩けるのかしら。

まぼろは、首を傾げた。

暗闇で目が慣れてきたせいなのか、地面がよく見える。

いいえ、私の目が慣れてきたのではないわ、大地が光っている。

やたかが、歩いた後に光が生まれていく。まぼろは、走りだした。

自分の呼吸が聞こえる。光が見える。清浄な光だ、闇を押しつけてまぼろを包み込んだ。

森が途切れる。まぶしい。まぼろは、思わず手で目を隠した。

まるで、お天道様が私の目の前におらっしゃるようだ。

まぼろは、おそる、おそる自分の目を覆っていた手を退けた。

人影が、見える。人影は、まぼろを見据えて立っている。

「まぼろ、よかった。まぼろなら気がついてくれると思った」

声が聞こえてきた。

「やたか、やたかなの？」

まぼろは、叫んだ。やたかの声が聞こえて安心したのか足がぐぐくと震える。

光の中にいるやたかは、高天原におられるという天津神のようだ。まぼろは、光の中にいるのが本当にやたかなのか恐ろしくなってま

た声をかけた。

「やたか、その光は何？ なんだか、怖いわ」

「平気だよ、まぼろ。鏡の、光だ。恐ろしいものじゃない」

「かがみ……？」

やたかの声に反応するようにまぶしい光が、少しずつ小さくなっていく。

不安になったまぼろは、やたかの傍まで歩み寄った。

「やたか、鏡ってまさか……」

声が、震えた。まぼろの目はやたかの腕の中に大事そうに抱えられている光輝く包みに釘付けになった。

神殿に奉られてあるはずの八咫の鏡の鏡が此処にあるはずはない。

「そうさ、八咫の鏡だよ」

さも難しいことでは無いようにやたかの声は淡々としていた。

嘘なんだ、嘘をついてるんだ、やたかは私を驚かそうとしている。

「やたか、そんな嘘面白くはないわ。私を驚かそうなんて、ひどいわ。だって八咫の鏡は、神殿に奉られているんですから」

神殿に奉られてあるはずの八咫の鏡の鏡が此処にあるはずはない。

「あの、鏡は偽者だよ……」

偽者……？ あの鏡が偽者？

「里長さまの目を盗んですりかえてきた。滑稽だね、あんなに崇めていても誰も偽者とは気がつかないよ」

頭がくらくらとする。耳鳴りが酷い。

「やたか、今ならまだ大丈夫だよ。私、黙っているから……」

「

やたかは、首をふった。

「無理だよ、まぼろ……直に鏡を奪いに大帝の追っ手がくる。まぼろ……あの里は滅びるんだ」

里が滅びる？ 何を言っているのだろうか。あの、豊かで平和な里が滅びる？

まぼろは、首を振って後ずさった。

嘘なんだ、嘘をついてるんだ、やたかは私を驚かそうとしている。
「こうなることは、予想がついていた。大帝の兵がもう里に攻め入っているはずだよ。ほらご覧、里に火がついた」

やたかは、里の方向を指差した。赤い点が幾つも黒い闇に描かれている。

里に火が

「！！」

ととさま！！——　　かかさま！！！！

自然に里の方角に駆け出そうとするまぼろの手をやたかは掴んだ。

「今、里に向かったら無駄に死ぬだけだ。大帝の兵はきつと里の者たちを皆殺しにするよ」

皆殺し——　　まぼろの頭の中で何度も木霊す。なんでやたかは平気なの？みんなが殺されるのに……

やたかの、漆黒の瞳は揺らぎもしない。まるで、人形のように淡々と話す。

「お前は、無力なんだ。分かって、まぼろ。お前だけは死なせたくは無い……」

声は、熱をはらんでいるのに瞳は冷たいままやたかはまぼろに懇願した。

まぼろは、首を振った。

「無理よ——　私だけが逃げるなんて……私……」

その時だった。やたかが、まぼろの手を引くとそつと抱き寄せた。

やたかの息遣いが聞こえる。まぼろは、驚き硬直したが何故だか心の何処かでは安らぎを感じた。

まぼろが、泣いていたときよくこうして慰めて貰った。

まぼろは、肩を震わせて泣いた。

「お前だけでもと私は——　あの方に背いてまで——　まぼろ……」

——
やたかの声が耳元で静かに響いた。

——　あの方……あの方……あの方……

「まぼろ!!!」

まぼろは隙をついてやたかが、大事そうに持っていた八咫の鏡を奪い取ると数歩後ろへ下がった。

「やたか……あの方って?…もしかして……やたかは、その人の命令で……鏡を盗んだの?」

少女は、幾筋もの涙の痕を作りながら少年を見つめた。

やたかの顔が見えない。見るのが恐ろしい。

「答えて!やたか!!」

やたかは、悲しそうに顔を伏せたまま答えようとしない。

「……私……里を助けに行く……」

八咫の鏡を、両腕でしっかりと持ちながらまぼろはまた数歩後ろへ下がった。

「さようなら、やたか……」

そう言うともぼろは里の方向へ走り出した。

やたかは、闇に消える少女の背中を寂しそうに見つめた。くすくすと耳をくすぐるように笑い声が聞こえる。

こりゃあ酷い振られようだなあ。

別の声がまた聞こえる。

我らが貰うぞ、八咫の鏡

また別の声が聞こえる。

モラウ……モラウ……

笑い声が、やたかを包み込む。やたかが、きつと声の主たちを睨みつけると声の主たちを追い払うように強い風が通り過ぎた。

笑い声が、段々小さくなる。

やたかは、濃厚な闇を見つめながら小さく呟いた。

「さようなら、まぼろ」

第六話

闇の中をまぼろは駆けていた。

私が、行ってもやたかの言うとおり殺されるだけかもしれない。
でも――逃げ出すことなんてできない！

里の皆の顔が浮かび上がる。どれも幸せそうな顔ばかりだ。

まぼろは、息を上げながらも走りだす。

闇の中でも光が溢れる。八咫の鏡だ。なんと温かい光だろう。

まぼろは、勇気を貰うように八咫の鏡を抱きしめた。

つと三つの闇がまぼろの横を通り過ぎた。

「――！」

異変に気がついたまぼろは立ち止まった。

見つけた、見つけた

また別の声が聞こえてくる。

八咫の鏡を渡せ

背筋がゾクリとする。笑い声が、辺りを包み込む。

「だつ――誰?!」

恐るおそるまぼろは声の主たちに聞いた。

だが、声の主たちはまぼろの質問には答えようとせずむしろまぼろが怖がっていることを知って喜んでいてもいっように笑い声は一層大きくなる。

「五月蠅い!!!!」

まぼろが、叫ぶと声の主たちは笑うのを止めた。

しんと静まり返った森の中にまぼろは立ちすくんだ。

耳鳴りがする。遠くのほうから――

やってくる!!!!!!

カガミヲヨコセエエエエ!!!!!!

鼓膜が張り裂かれるような声を合図にしたようにまぼろはまた走り出した。

はやく、早く、早く、早く——一刻も早く——

!!!!

まぼろは、走り続ける。

捕まればどうなるか。まぼろには、分かっている。全身を刺すようなこの緊張感。

疲れて足が縋れそうになる。もう一人の自分が叫ぶ。

まぼろ、分かっているでしょう。もし、あの声に掴まったら——

もう少しの我慢……もうすぐ里に着く——ほら見え
てきた

「ああ……なんて酷い……」

まぼろは立ち尽くした。

天が真つ赤に燃えている、まぼろの生まれ育った里が燃えている。

——ととさま!!!! かかさま!!!!

まぼろは、泣いた。

あの緑豊かな里は燃え盛る炎に覆われていた、少女の顔に恐怖が込み上げる。

後ろからまたあの声が聞こえてくる。

里に入れば大帝の兵に殺されてしまうかもしれない。だが——

だが今は迷っている時ではない。まぼろは、燃えさかる里に足を踏み入れた。

荒れ狂う野獣のような炎を避けながらまぼろは、走り続けた。

ととさま—— かかさま—— 何処にいるの？

どうやら大帝の兵は引き上げたようだ。

里の人々が、所々に倒れている。

男たちは皆剣をもち――女たちを庇いながら――

まぼろは、地面に膝をついた。

声たちは、どうやら巻いたようだ。肩が、呼吸をするたび大きく上下する。大丈夫、鏡はここに持っている。ふと、まぼろの目は神殿に向けられた。鏡がない――やはり大帝の兵が奪っていったのだろう。

神殿の上に二つの塊が転がっている。

嫌な予感がする。

まぼろは、最後の力を振り絞り神殿まで歩いていく。
どくり、どくりと心臓が波打つ。

そんな――まさか――

「ととさま――かかさま………」

まぼろは、力なく倒れている男女を見つめた。

「ま……ぼろ………」

消え入りそうな微かな声が聞こえる。里長が、手を伸ばし死の淵からまぼろに語りかけているのだ。

「ととさまあ………!!!」

まぼろは朦朧とする意識の中死へと旅立とうとする父の手を握った。

「……まぼろ……生きていたのか?………おお………」

・まぼろ

まぼろの頬を大粒の涙が落ちる。息をしたいのに苦しくて息がままならない。嗚咽が酷くてうまく話せない。

「あつというまだった……大帝の兵……奴らは化け物だ……」

そついうと里長は、涙を流した。里長のこんな顔を見るのは初めてだった。

「神道はもはや失われた……我らに道はない――」

「だいじょうぶだよ、ととさま……ほら、八咫の鏡はちゃんとここにあるよ」

瀕死の里長には、もう八咫の鏡は見えていないようだった。

「まぼろ・・・お前は温かいな・・・お天道様のように温かい・・・」

里長の手の力が抜けていく。目の光が消えていく。

「ととさま？・・・」

揺らしても父は起きてはくれなかった。まぼろは、壊れたように首を振った。

耳鳴りがする

声が届いてくる。

髪は乱れ力なく父親にすぎた少女にあやすように声が聞こえる。

可哀想に、死んじゃった

別の声が聞こえてくる。

お前もそうなりたくなければ、八咫の鏡を渡せ

別の声が聞こえる。

ワタセ、ワタセ

まぼろは、笑った。可笑しくて仕方が無い。大帝もこの声たちも皆必死になってこの鏡を奪いあっている。この里の象徴でしかなかったこの鏡を

やたかさえも・・・

醜い

欲しい物を奪いとるためならば人の命などこうも簡

単に奪えるものなのか。

まぼろは、首を振った。

こんな、こんな鏡があるから！！！！

まぼろは、八咫の鏡を高く振り上げた。

まさか、止めるおお！！！！

声たちは、実態になってまぼろを止めようとする。真っ黒いマントを羽織った異型たち。

影が形になったような恐ろしい彼らの姿を瞳に映しながらまぼろは鏡を地面に叩きつけた。

八咫の鏡は、いとも簡単に神殿の上で粉々になった。影たちは咆哮

しまぼろに襲い掛かった。

影たちの鋭い爪がまぼろに襲いかかろうとしたその時

粉々になった鏡の破片が光だした。

「えっ……」

まぼろは、目を見開いた。八咫の鏡に宿っていた聖なる光がまぼろの体を包み込む。

—— なんと—— なんと—— なんと——

おお！！！！

まぼろを包み込む光は襲い掛かる影たちを退けた。

そして、少女は光に飲み込まれ光は一つの柱になり暗く曇った天に上っていった。

神殿の上には少女の姿は無く。あるのはただ無残に横たわる男女と粉々に碎かれた鏡の破片だけだった。

間章

桔梗、桜、女郎花、橘——ここには、さまざまな花が咲き乱れている。

ここは、天女の庭——そう呼ばれている。
咲き乱れる白桜に腰掛けているのは、一人の男。
男の髪は、艶やかに波打ちその端正な顔立ちはこの世のものと疑うほど美しい。

「さすがは、天女の落とし子・・・琥珀様じゃ、まこと見目麗しい。貴方の前では着飾った花達もまるで朝霧のように薄れてしまう」
そう、声をかけてきたのは木の上で寝そべっている少年だった。

「琥珀様に気安く声をかけるでないわ。胡蝶」

いつの間にも現れたであろうか純白の着物を纏った女が白桜の陰から現れた。女は、木の上で寝そべる青年をねめつけた。

「おや、お白姉さんじゃあないか。すまないね、あんたの木の上で羽を休ましてもらってる」

「恥知らずな蝶め、振り落としてやるわ」

「お止め、お白」

美しい凜とした声が聞こえた。女がまた一人橘の木の陰から出てくる。能面を被っているような肌の白い女だった。

「青紫^{せいし}ねえさまの言うとおりよ。お白ねえさまったら、琥珀様の前で取り乱してあたし恥ずかしいったらないわ」

また、いつの間にか鈴蘭が見事に咲いている場所にちょこんと少女が立っている。

「子鈴、お前えー」

お白が、少女を睨みつけると少女は慌てて姉の紫の袖の下に隠れた。
「青紫ねえさま、子鈴を守ってくださいな。お白ねえがまたあたしを叩こうとなさるの」

この様子を高みから見ていた蝶は笑った。

「これまた、お美しくなられて花の姫君達。琥珀様も罪なお方じゃ」
そう言ってけけと子鬼のように笑う。女たちは、そんな子鬼のように笑う少年を一斉に睨みつけたが、琥珀が笑っていたのに気がついてすぐに恥ずかしそうに俯いた。

「胡蝶」

胡蝶と呼ばれた少年は、身を起こすとふわりと寝転がっていた木から下りた。

少年の着物の見事な蝶の柄が風をはらんで舞い上がる。

「それで、どうだったんだい？八咫の鏡は大帝の手に落ちたかい」

少年は、にたりと笑った。

「それが、面白い事になったんだよ」

間章（後書き）

世界観つかめなくてすいません・・・

まぼろし・第一話

時は、混沌の世なり

まこと恐ろしきことなれど神道消えつつあり

天津神地上に託しし三種の神器手にし者

この中つ国

三国の王となるだろう

鳥たちがさえずる声が聞こえる

まぼろは、よろめきながら起き上がった。

着物が着替えられている。一体誰が……？

じつとりと汗をかいているせいか髪が顔に張り付く。まぼろは、髪をかきあげた。

——ここは、どこかしら？

まぼろは、困惑した。

「起きたんだね」

まぼろは、驚いて声の主を見つめた。そこには、赤い紅を引いた妖艶な女が立っていた。

女は、戸を閉め中へ入ってくる。着物からのぞく女の手は、驚くべきほど白く美しい。

まぼろが、ぼかんと口を開けていると女は美しい目を細めた。

「驚いただろう？ 婆が倒れたアンタを見つけてここへ連れてきたんだ」

一つ命貰いもんしたねと女は笑う。美しくそれでいて豪快に笑う女を呆然と見つめながらまぼろは礼を言った。

「いいんだよ……そうだ。アンタ腹減ってないかい？」

まぼろは、首を傾げた。そういえば減っているのかもしれない、感覚が鈍っているのかまぼろの腹はうんともすんともいわない。

「腹が減っていないくても少し入れたほうがいい。持ってきてやるから、もう少し休みな」

こくんと頷くとまぼろはまた布団の中に蹲った。

女が、戸を開け出て行く音が聞こえる。女の遠のく足音を聞きながらまぼろは、静かに目を瞑った。

目を瞑れば真っ暗なはずなのに目の裏側に焼きついたあの恐ろしい光景がよみがえってくる。まぼろは、耐え切れなくなって目を開けた。

胸が苦しい……。心が散り散りになってしまったかのようなうた。

まぼろは、顔を抑えずると起き上がった。

ととさま、かかさまは……。死んだ……。そして、

里の者たちも一人と生きてはいない……。

もう、泣く気力さえない――どうせなら、死んで

しまおうか？

死んだら、とさまやかかさまのいるところへ行けるかな。

風に乗って声が聞こえてくる。

顔を覆い悲しみに臥せっているまぼろの耳に楽しそうに笑う子供らの声が聞こえてくる。まぼろは、耳を澄ませた。何処から聞こえてくるのだろうか。

――あっちのほうから……

まぼろは、声のするほうへと歩き出す。

居間に出てみると庭のほうで子供たちが捕まえたばかりの蜻蛉を紐で繋いで遊んでいる。

きやつきやと声を出して笑う子供たち。一人、一人の笑顔は希望で輝いている。まぼろは、立ち止まり子供たちを見つめた。女が、子供たちを見つめている少女を見つけ立ち止まる。少女の顔は、絶望に満ちていてなんとも悲しげに見えた。婆の言葉が、蘇る。

――今は、そつとしておあげ。この娘は、死地をさま迷っておる。

婆は、死んだように眠る少女を見つめながら続けた。

――よっぽど辛いことがあ

ったんだろつ。心を閉ざしておる。

「……………あつ……………」

まぼろは、女に気づき身を固くする。そんなまぼろを見て女は、見惚れるような美しい顔で笑う。

「此処まで歩けるんならここで食べな。ほら、おいで」

女が、粥の盛つてある膳を居間に置くとまぼろは恐るおそる膳の前へ座った。

箸を持ち恐々と女を見つめる。

「大丈夫だよ、毒なんて盛つてないから。さあ、お食べ」

まぼろは、頷くと粥を啜った塩が利いてとても美味しい。

「・・・・・・・・とても、美味しい・・・・です」

女は、驚いた顔を見ると豪快に笑った。

「当たり前じゃないか、アタイが作ったんだから」

「・・・・・・・・・・・・おいしい・・・・」

少女の声が震えていることに気づき女は笑うのを止めて少女を見つめた。

「・・・・・・・・・・・・ひつく・・・・」

少女は、泣いていた。泣きながらも粥を頬張る。

「ちよつとアンタ、泣くか食べるかどっちかにしなよ」

女が、困ったように頭を掻く。まぼろは、関を切ったように泣きじやくった、わんわんと声を上げた。女が、まぼろの背を優しく摩つてやるとまぼろは女の胸に縋りついて泣いた。

子供らが一斉に泣きじやくるまぼろを驚いた様子で見つめた。

「ねえ、お銀ねえさん。なんでこのお姉ちゃん泣いてるの？」

「ねえ、どうして？」

いつの間にか子供らがまぼろの周りを取り囲んでいた。心配そうな顔を覗かせている。

「困ったねえ」

女は、困った様子で少女を見つめた。だが、まぼろは泣き止むことが出来なかった。

第二話

それから、まぼろは二日間熱にうなされた。朦朧とする意識の中でまぼろは何度か苦い薬を飲まされ手厚く看病を受けた。それから、何度もあの夜の夢を見た――父と母が死ぬ姿――あの恐ろしい影たち――夢の中ではまぼろは、無力な少女に戻っていた。少女は、あの時と同じようにまた闇の中を駆けていた。

ほうら走れ　　ほうら走れ　　走らなければ
 どうなるかお前は知っているだろう？とさまの目の光が失われる
 瞬間が頭の中を駆け巡る。

少女は、声にならない叫び声を上げる。

お前だけでも私はあの方に背いてま

やたかの声が耳元で静かに響いた。

「やたか
わたし……!!」

少女は、顔を上げた。

「ひいつ!!」

やたかの顔があゝの異形たちと重なる。やたかの顔が崩れて中から闇が溢れ出す。

カガミヲヨコセエエエエエエ！！！！！！！

声が、木霊す。

少女は、首を振りながら頭を抑える。

「もう止めてよお！……ああ……」

死が——死が溢れている——どうして……

少女は、か細い腕で体を抱きしめる。しゃがんで啜り泣く。

心の中で声が響く。

何処に光があるのだろうか？

洞窟の中で水が木霊すかのような神秘的で美しい声だった。

少女は、涙でぐちゃぐちゃになった顔で前をむいた。

声が、響いてくる。

私は光がほしい――誰か光をおくれ……誰か、だれか――

声は、懇願する。だが、その願いは叶わないとも言つように淡々とした冷めた声で懇願する。

誰に祈るわけでもなく――ただ、吐息のように滑りてた願い――

「ねえ、誰か……誰か、いるの？」

少女が、問いかけると声は急に聞こえなくなる。少女がぼうつと立っているとき背中の方から軽く肩を叩くように声が聞こえてきた。

あなた……だれ？……

声を合図にしたように辺りが明るくなる。少女は、口を抑えた。

(ここは――牢屋……)

鉄格子の檻が、すべての自由を奪うように規律を守るように並んでいる。少女は、声の主をまじまじと見つめた。

少年だ――少年が冷たい牢屋の中で椅子の上にちょこんと座って少女を見つめている。

いや――見つめているのではなく顔を向けているのが正しいだろう。

何故ならば少年は、何やら模様が描かれた袋を被されているから。

まるで、罪人のように――

「酷い……誰がこんなことを……？」

まぼろは、泣き出しそうな声を上げたが少年はさも珍しく無さそうに淡々と言う。

ああ……陰陽師が私にほどこしたものだ

「……酷い……酷いよ……」

少女は、泣いた。世界は、なんでこんなにも無慈悲なのだろう・・・
・・・？天津神は、何故こうも私達に残酷な運命を与えるのだろう。

私のために泣いてくれるあなたは誰・・・？
天から舞い降りた天女？それとも、私が作り上げた幻？

少年は、私に興味があるのだろう。上ずった声で聞いてくる。

「いいえ、どちらも違うわ。貴方こそ私が作り上げた幻じゃなくって？」

少年は、くすりと笑った。

「いいや、違う。私は、ちゃんと此処に存在している、あなたと同じように・・・」

うんと少女は頷く。二人は笑いあった。久しぶりだこんなに笑ったのは、夢の中でもなんて心地がいいのだろう。少女は、考えた。これが、もし夢の中でも・・・この少年を逃がしてあげられたら・・・どんなにいいだろうか・・・

「出してあげる・・・逃げましょう、ここから・・・」

少年は、驚いたように顔をあげる。

逃げる・・・？ここから・・・？

そして、飽きたように少年は笑う。

やはりあなたは幻だ。私の作り上げた・・・

・・・最後の・・・

少女は、怒って声を荒げた。

「いいわ、私のことを幻だと思うならそう思えばいいわ。私は、鍵を取ってくるから」

少女は、そう言うつと鍵の場所を少年に聞いた。少年は、止めたが少女は頑として聞かなかった。

少年の牢屋には大きな錠がかかっていた、如何考えても少女の力では無理には開きそうにもない。危険でも少年を逃がすには鍵を取ってくるしかないのだ。

鍵を持っているのは門番だよ。でも、あまり無理しないで

少女は、まかせてとでも言つように勇敢に笑つた。

：第三話

そして、また闇の中を駆ける。

一人でも何故だか怖くは無かった。

光が見える。きつとあそこに違いない。少女は、部屋を覗いた。部屋には、太った男が机に足を乗せ眠っている。豪快ないびきだ。

少女は、ゆっくりと男に近づいた。男は、いびきをかいていい夢でも見ているのだろう。へらへらと品のない笑いを上げた。

（鍵・・・・・・・・鍵・・・・・・・・）

少女は、鍵を探した。男が、いきなり少女の手を掴んだので少女は驚いて思わず声を上げた。

（いけない！！）

少女は、急いで掴まれていないほうの手で自分の口を抑えた。

（良かった）少女は安堵した。男はどうやら深い眠りに入ったらしいまた高いびきを掻き始める。

ゆっくりと指を外してから力なくだらんとしている男の大きな腕をお腹の上にやつのことで置いた。ちゃりんと金属が地面に落ちる音がする。

鍵だ——鍵があつた！！少女は、鍵を慎重に拾い上げた。

（あつた！！あつたわ！）

これで、あの少年を助けることが出来る。

少女は、駆け出した。

牢屋に戻ると少年は驚いたように声をあげた。

またわたしは同じ幻を見ている……………

「見て、とつてきたわ」

少女は、につこりと笑うと鍵を錠に指した。錠は錆びているのか巧く回せない。

「うまく開かない……………」

少女が、困り果てたように少年を見つめた時だった。門番の図太い声が聞こえてくる。門番が、起きたのだ鍵がないことを知って慌てふためく声が聞こえる。

いや――門番と一緒に違う声も聞こえる……遠くから聞こえてくる。

酷い耳鳴りだ。

少女は、凍りついた。動けない、暗闇から目を背けることが出来ない――

あなた……影に追われているの？名も無い者たちに追われているの？

少年が、少女に聞いた。少女は、凍りついたまま頷いた。

過酷な宿命を背負った幼子

よ……

少女は、驚いたように少年を見つめた。少年は、椅子から降りると少女の近くへ歩み寄った。

少女の目の中に不可思議な模様が浮かぶ。少年が、被されている袋の模様を見つめる。

二つの穴から覗いている瞳が一瞬光ったような気がした。

あなたを助けよう、罪深きわたしを助けて
ようとした愚かなあなたを

少女は、首を振った。嫌――何を言っているの？逃げよう……一緒に……

少年は、困り果てたように笑うと首に掛けていた首飾りを少女に渡した。

「綺麗……」

豪華な銀の首飾りだ真ん中には赤い石が埋め込まれている。まぼろが、そういうと少年は嬉しそうに笑った。

――母上の形見の品なんだ……きっとあなたを導いてくれる

声がだんだん近づいてくる。泣き叫んでいる。何処だ、何処だと私を探している。

段々視界がぼやける。知っている、私はこの感覚を知っている。夢から覚めるときが近づいているのだ。

少年の姿が見えなくなる。牢屋にいて黙って酷い仕打ちを受ける少年――ああ、消えてしまう。

少女は、叫んだ。

「必ず――必ず貴方を助けに行くから……待ってて必ず助けるから――」

少年は、困ったように頷くと少女に聞いた。

――あなたの名前は……？

小さな今にも消え入りそうな声だった。

「私は、まぼろ――あなたは？」

少年の姿が見えなくなる。

わ たしは

・

・ ・ ・ ・ ・

三 ク ニ

まぼろは、目を覚ました。

じつとりと汗を掻いている。辺りを見渡す。そこは、牢屋ではなく見たことのある光景・・・・・・・・まぼろは、立ち上がった。夜中らしい。辺りは薄暗い。なんて、可笑しな夢なのだろう？夢にすれば、息ずかいまで聞こえてくるような夢だった。それにあんな牢屋見たことないからんと音がする。どうやら、まぼろの裾から何か落ちたようだ。まぼろは、落ちた物を拾い上げる。

（首飾り） あ的首飾りだ・・・・・・・・では・・あの夢は・・・・・・・・）

本物・・・・・・・・まぼろは、愕然とした。

では、あの少年は今もあの牢屋にいるというのか？

「ミクニ」

確かにあの少年はそう言っていた。ミクニ・・・・・・・・まぼろは、

何度も名を呼ぶ。

ととさま、かかさまだったら絶対に助けると言うはず。けっして見捨てるなと

少女は、天に昇る月を見つめた。

まだ、死ねない・・・

少女の目に決意の光が浮かんでいた。

：第四話

天に日が昇り始めるたころ女が、部屋の中に入ってみると床に臥せていた少女が地面に手について深々と礼をした。

「ちゃんとした礼もできずに・・・申し訳ありません・・・私は、まぼろと申します」

女は、にこりと笑うとまぼろの傍まで近寄り膝を折った。

「顔を上げな。アタイは、お銀ってんだ。来な、お婆がアンタを呼んでる」

まぼろは、顔を上げ頷くとお銀の後についていった。

私を救って下さった。お婆という方———どのような方なのかしら・・・・・・

障子が、続いている部屋へと案内される。

「あそこがお婆の部屋だよ」

お銀が、案内したのは赤い障子紙が貼られた奇妙な部屋だった。まぼろは、生唾を飲み込んだ。

「気をつけな、お婆は怪より妖怪より厄介な婆様だからね」

お銀は、笑う。頭につけた鼈甲の簪がざらりと光った。

「お銀や、わしは怪より妖怪より厄介な婆になつたつもりはないぞ」何千年と生きた大木が風に揺られて枝を揺する音のような声が聞こえた。重くそれでいて安心できる声。

お銀は、おお怖い、怖いといって笑うとまぼろを行くように促した。

「ほら、お行き。大丈夫、優しい婆様だよ」

頷くとまぼろは歩き出す。

「お入りな」

お婆の声が障子の中から聞こえる。まぼろは、意を決して障子を開けた。

中には、白髪頭の老婆が座っていた。髪をきつちりと結っていて威厳を感じる顔立ちをしている。

まぼろは、呆然と老婆を見つめていたが老婆が皺を深めると急いでお辞儀をした。

「命を助けて頂き感謝のしようありません．．．ありがとうございます」

まぼろは、自分の身に起こった出来事を話した。老婆は、ただ黙って聞いていた。大帝の兵が里を襲ったことと自分が八咫の鏡を割ったことは黙っていた。それと、まぼろを包んだあの光のことも．．．何故生き残ったのか今でも分からないからだ。どうしても説明が出来そうにもない。里が、何者かに襲われ命からがら逃げたとまぼろは嘘をついた。

「では、お前の里が誰に襲われたのか分からないのじゃな？」

「はい．．．」

まぼろは、頷き俯いた。

「何故なんでしゃうか．．．里の人たちが死んで．．．私だけが．．．生き残って．．．」

はつとする何故こんなこと言ってしまったのだろう。この方に言っても仕方のないことなのに．．．

老婆は、少し考えて障子の間から見える空を見上げた。

「人の命は川に流れる笹舟のようじゃのう．．．川の流れに身をまかせ途中で力尽き沈むものもあれば岩に叩きつけられるものもある．．．」

まぼろは、老婆を見つめた。

「だがね．．．まぼろ．．．時折おるのだよ。沈んでも浮かび上がってくるものが．．．」

まさに、今のそなたのようじゃのう。老婆は笑う。

「何故自分だけが生き残ったと考えても仕方のないことじゃ。それは、歳をとってから何度でも考えられることぞ．．．そなたは、まだ若い。答えはいくらでもある」

「．．．はい．．．」

まぼろは、頷いた。心が、少し晴れていくような気がした。もう、

泣きはしないだろう。そう、きっと大丈夫……まぼろは、顔を上げた。今は、やるべきことがあるじゃないか。

「お婆様……ありがとう……」

約束をした、絶対に助けると――――牢獄の中に今も一人にいる少年との約束。

老婆は、笑みを深めた。

「……道は見えておるようだね」

時に、これから如何する気であるのじゃ？老婆が、唐突に聞いてくるのでまぼろは目を丸くした。

「……あつ！」

そういえば……何も考えてはいなかった……まぼろは、自分を戒めた。なんて愚かなのだろう……

ミクニを探すのだって何も手がかりがないし何しろ里から一步も出たことがないまぼろにとって里以外の世界は未知の領域だった。

老婆は、笑うと混乱するまぼろをいなめた。

「安心なされ、実はわしらは明日ここを出て行くのじゃよ。わしらは放浪のみ――――旅芸人じゃ、どうじゃ……わしらと供に行く気はないかえ？」

まぼろは、呆然と老婆を見つめた。考えても見なかった提案にまぼろは、暫しの間黙り込んだ。

今差し伸べられた行為を無碍にすれば自分はきつと今度こそ死ぬだろう。それだけは、避けなくては……旅芸人なら様々な土地に行くそうすればきつとミクニへの手がかりが得られるはず。

まぼろは、自分の中に希望が湧いてくるのを感じた。

「はい、よろしく願います」

まぼろは、頭を下げた。

：第五話

次の日、出発するまえに仲間となる旅芸人たちにお銀がまぼろを紹介した。どうやら、お銀がすべてのことを任されているらしい。

「昨日は、荷造りで忙しくてろくに紹介も出来なかったから慌しいけど堪忍しておくれ、まぼろ」

謝るお銀にまぼろは首を振った。居間には数人の男女が、朝餉を食べている途中だった。男、女、子供・・・まるで一つの家族のようだ。

「皆、飯を食べているとこ悪いがね。紹介するよ、この子は、まぼろだよ。今日から新しく加わることになったんでよろしく頼むよ」ほらアンタからも。お銀はそう言うのと緊張しているのか立ちすくんでいるまぼろを無理にお辞儀させた。

「よろしく・・・おねがいます!!」

なんとも弱々しい声になってしまった。まぼろは、一人赤面した。

お銀が、団員一人ひとりの名を教えていく。まぼろは、必死で指を折りながら名を覚えた。

「そうだね・・・適任なのは・・・」

お銀が、何やらぶつぶつ言っている。

「紅葉、お前まぼろにいろいろ教えてやんな」

紅葉と呼ばれた少女は、嫌そうに顔を顰めた。

「嫌だね、面倒背負い込むのは御免よ」

ふんと顔を背ける。肩で切りそろえられた髪がさらりと揺れる。お銀の美しい眉がつと上がった。

それを見た紅葉は青くなって言った。

「分かったよ、面倒みればいいんでしょ！」

まぼろは、そんな二人の様子をじっと見比べていたがお銀に促されて不貞腐れている紅葉の近くに身を寄せた。とりあえず用意された朝餉を食べ茶を飲んだがぶつぶつ不貞腐れている紅葉が隣にいてな

んとも落ち着かなかつたまぼろであつた。

大きな荷車に荷物を乗せ旅一座は旅立つ。まぼろは、身一つの旅立ち

ふと空を見上げた。鷹がその大きな翼を広げ悠然と飛んでいた。暫し立ち止まっていたためそれに気づいた紅葉がまぼろを一喝した。まぼろは、返事をして走り出す。

その日まぼろは、旅一座の姉さんたちに囲まれまぼろの目は美しい。まぼろの髪は、絹のようと褒めちぎられた。まぼろが、恥ずかしくなり頬を赤らめると姉さんたちはなんと可愛らしいんだろうと声を上げた。

姉さんたちからやつとの思いで解放されたまぼろは、やつと安堵の息をついた。しかし、直に子供らがまぼろの周りを取り囲んだ。少女が、まぼろの顔を覗きこんだ。

「もう悲しくない？まぼろお姉ちゃん」

まぼろは、頷いた。

「うん、ありがとう。えつとお里ちゃん」

お里は、にっこりと笑った。

「まぼろ、俺の名前も覚えてるか？」

悪戯ぽい瞳で少年が、言った。

「えつと、原介くん・・・？」

名を当てられ嬉しそうに子供らは顔を見合わせた。それから、すっかりまぼろは子供らに懷かれてしまった。

その夜——一座はお堂で夜を過ごすことになった。団員たちが火を囲んで過ごしている。

一日中歩き続けて疲れていたまぼろは、ほっとしたが草履を脱いでぎよっとした。足が血だらけだったのだ。紅葉が、それを見てまぼろと同じくぎよっとする。

「いやだ・・・痛そうね・・・あなた、良く我慢したわね・・・」
ちよっと待つててというとき紅葉は、まぼろに手ぬぐいを渡した。

「裏に川があるはずだから足洗つて来なよ、ほら」

まぼろが、紅葉と手ぬぐいを交互に見つめると紅葉は不機嫌そうに

顔を歪めた。

「何よ」

まぼろは、首を振った。

「有難うございます」

まぼろが礼を言つとそそくさと紅葉は去っていった。それを、見ていたお銀が苦笑する。

「あれで結構あいつは面倒見がいいんだよ、無愛想だけど堪忍ね、まぼろ」

まぼろは、笑った。嬉しさと照れくささが半分半分押し寄せてきてなんとも可笑しな気持ちだった。

子供らもまぼろを心配したがまぼろの血だらけの足を見て慌てて退散した。

お堂の外は真つ暗だった。まぼろは、足を庇いつつ川へと向かった。ちよろ、ちよると水が流れる音がする。まぼろは、川の中に足を入れた。

「冷たい・・・」

ふふつと笑う今日も綺麗な月が出ている。満月

「綺麗・・・」

「ふむ・・・確かに何か魅せられるものがある」

ふいに声が聞こえた。まぼろは、ぎょつとして辺りを見渡した。聞

こえた、確かに聞こえた・・・少年の声・・・

「誰・・・？」

さわさわと木々が揺れた。木々の間から出てきたのは一人の少年。

格好は、髪を一つにきっちり結って身なりは武士のようにも見える。

「我の名は胡蝶」

まぼろは、身構えた。少年は、何処かしら異様な空気を発していた。人だ・・・確かに人だが・・・何かが違う・・・

「あなた・・・一体・・・」

まぼろは、目を細めた。

月に照らされて少年は妖艶に笑った。

：第六話

少年は、妖艶に笑った。

「おや・・・もしかして、気づいたのかえ？ご名答！・・・我は人は遙かに違う一族のもの」

そう言つとふわりと空へ舞い上がる。美しい蝶の柄が空へと舞い上がる。

「名を胡蝶と申す」

空に浮いたまま胡蝶と名乗る少年はまぼろを見下ろした。

「そなたをある方のもとへと連れて行く、安心せい決して悪いようにはせん」

私を連れて行く？まぼろは、後ずさった。

少年は、怪訝な顔をする。

「もしや、そなた気づいていないのか？その強大な力を身にやつして」

どきりどきりと脈打つ。どういうことだ？強大な力・・・身に覚えがない。

まぼろが、聞き返そうとした時だった。紅葉の声が聞こえる。どうやら、帰りが遅いまぼろを心配して迎えに来たらしい。まぼろは、返事をする。振り返ると少年は何処にもいなかった。幻とも思えない。

まぼろは、とにかくお堂に戻ることにした。戻ると紅葉は膨れた顔をしていたがまぼろの足の手当てを始めると驚いたような顔をした。あんなに血だらけだったまぼろの足には傷一つなかったからだ。まぼろも目をまるくした。

少年の言葉が蘇る。

もしや、そなた気づいていないのか？その強大な力を身にやつして
(・・・・・・・・・・・・・・・・)

あの少年は、何を言いたかったのだろう。

まぼろは、考えを振り払うと強く目を瞑って寝返りをうつた。

何日か歩いて最初の目的地の町に着いた。今日からここで芸を見せるのだ。舞台を男たちが作り上げていくその様子をまぼろは、呆然と眺めていた。

「まぼろ、ちよいとこっちにおいで」

お銀に呼ばれまぼろは安心したようにお銀の元へ駆け寄った。

お銀は、財布からお金を出すとまぼろに渡した。

「金は数えられるかい？」

まぼろは、頷いた。お金なら里で見たことがある。時折商人が里にやって来たから、まぼろは商人たちと話をするのが好きだった。商人が話をするだけで見たことも無いものが話を聞いているだけでまじまじと見てとれるような気がした。お金の数え方も商人に教わった。

お銀は、まぼろに金を渡した。

「これでみんなの分の夕餉を買ってきておくれよ」

子供たちと遊んでいた紅葉を、お銀が呼んだ。

「紅葉いーお前もまぼろと一緒にいってくれよ」

紅葉は、ぶすつとした顔をしたがお銀の眉がつと上がるとすぐさままぼろを睨みつけ近寄ってきた。

「余った金は駄賃だよ」

紅葉の顔が明るくなる。

「わかった、買ってくるよ」

ほら早くとまぼろの腕を紅葉は引っ張った。まぼろは、手を振るお銀に手を振り返すと紅葉に着いて行った。町は、驚くべきほど人が溢れかえっていた。まぼろは、ため息をついた。見たことの無いものばかりであった。商人が言っていたとおりだ。それに想像したとおり

まぼろは、嬉しくて紅葉の腕を引っ張

り店を見て回った。紅葉の顔も輝いていた。

夕餉には、佃煮を買い握り飯も人数分買った。紅葉が、夕餉の買い物をしている間まぼろは店の隅に静かに座っていた。

隣には、飯を食べている職人風の男が二人座っていた。

ひそひそ話す声が聞こえる。

「聞いたか？とうとう、大帝が北を攻めるらしい」

男が、驚いた声を上げる。まぼろの体がぴくりと強張った。

「本当か？そりやあまた突然な話だな」

まあ、下々の俺たちには関係のない話だがな。と男たちは笑った。

まぼろは、現実を引き戻された。

紅葉が、呼んでいる。まぼろが、返事をするに心配そうな顔をしてまぼろを見下ろしていた。

「どうしたの、あんた、気分でも悪いの？・・・顔青いよ・・・」

まぼろは、首を振った。大丈夫と笑って見せると紅葉は少し笑顔になっただけだった。

「お弁当は宿に届けてくれるってさ、駄賃貰ったから何か買いにいいかい」

嬉しそうな顔をする紅葉にまぼろは頷いた。

・第七話

とうとう、大帝が北を攻めるらしい

大帝は、どれだけの命を奪えば気が済むのだろうか？ 私から全てを奪ったはずなのにまだ誰かの全てを奪うつもりなのか……・……・ちりちりとまぼろの胸を焦がす何かが大きくなっていく

禍々しいもう一人の自分……自分の中で禍々しい何かが脈打つ
のを感じた。今まで感じたことの無い感情
憎悪

蛇のようにぐるぐるとまぼろを取り巻いて
毒のようにまぼろを犯していく。

じゅうじゅうという香ばしい音がしてまぼろははっとした。目の前には鉄板がじゅうじゅうと音を立てている。甘い匂いが漂う。

「おっちゃん、焼餅一つね」

まぼろが、呆然と見つめていると紅葉が嫌そうな顔をする。

「何よ、あんたも食べたいの？」

まぼろは、首を振った。あつそと紅葉は興味が無さそうにいうと残ったお金を渡した。

「あんたの分」

まぼろは、じつと紅葉を見つめた。紅葉は、焦って付け加えた。

「なによ、ちゃんと半分に分けたわよ」

そう言うとはぐりと焼餅を頬張った。紅葉の顔が綻ぶ。

もう一口という時、叫ぶ声がした。

「泥棒——泥棒だ！誰かその小僧を捕まえてくれ——！」

まぼろは、はつとして声のする方を見つめた。まだ年が五つくらいの少年が駆けてくる。後ろから太った男が追いかけてくる。

少年は、まぼろを避けた。少年と目が合う

どんと鈍い音をたて少年は転んだ。紅葉とぶつかってしまったのだ。よろめいた紅葉の手から焼餅が落ちる。紅葉の短い悲鳴が聞こえる。まぼろは、派手に転んだ少年に駆け寄った。少年は、いててと体をゆっくりと起こしている。

「大丈夫？」

まぼろは、少年に手を差し伸べた。少年は、まぼろを睨みつけると手を払いのけた。そして、はつとした様子で少年は辺りを見渡す。

「あった」

少年は、どうやら手に持っていたものを落としたらしい。慌ててとりに走る。少年は大事そうに包みを持ち上げるとぎゅっと抱きしめた。

「はなせよ——！」

紅葉が少年を持ち上げた。少年は、ばたばたと足をばたつけせ抵抗した。だが、紅葉は離さないじつと少年を黙ったまま見つめている。顔が、少し青ざめているようにも見える。

「紅葉……？」

まぼろが、声をかけても聞こえている様子がない。

太った男が、やつのことで追いつきげいぜいと息を荒げている。

「でっでかしたあ——！嬢ちゃんっ——！」

紅葉が、はつとして男に子供を差し出した。男は、子供から包みを奪うと悪態をついた。

「この餓鬼い、店のもんを掻っ攫いやがって。番屋へ引っ立ててや

る」

男は、紅葉に礼を言うのと少年の小さな腕を引っ張る。少年は、嫌だ、離せと喚いた。まぼろは、その様子をただ呆然と眺めていた。回りにいる民衆もぼんやりと少年が男に連れて行かれるのを眺めていた。誰も助けようとしなない。ただ、見ているだけ。

何故――？

答えは、簡単関わらないほうが楽だから。

「あの――！」

まぼろは、男を呼び止めた。男は、なんだというばかりに嫌な顔をする。

「――その子、許してあげてくだ

さい！」

「何言ってるの？あんだ……」

紅葉が、声を上げた。

男が、驚いた顔をする。

「お金ならあります、盗んだもののお金は払いますから」

男に近づいてまぼろはお金を見せる。さっき貰ったばかりのお金だ。足りるかどうかわからない。

「残念だけどこんなはした金じゃあ、足りねえよ。何しろこいつが盗んだのは漢方薬だ。下々の手には到底手が出せないもんだ」

まぼろは、悔しくて唇を噛んで少年を見つめた。力が無い――

――自分は何時だって無力だ……

「お願いしますー！」

まぼろは、頭を下げて頼んだ。男は、狼狽する。紅葉が、啞然とした顔でまぼろを見つめた。

「残念だがね、世の中そんな簡単には出来てはいないんだよ。頭なんて何回でも下げられるさ。それにあんたみたいな綺麗な娘さんとは関係のない小僧だ。なんで助けるんだ？」

まぼろは、頭を下げ続けた。

民衆は飽きれかえっている。

紅葉は言葉をなくして見つめている。

そうだ、この男の言うとおり頭を上げてさっさと帰ろう。簡単だ、
すいませんと謝れば簡単――

ミクニ・・・・・・・・御免ね・・

・私酷い人間になる・・・・

：第八話

まぼろは、顔を上げた。

「すいません・・・」

小さな声で謝る。男は、安心したように顔を緩めた。そして、暴れる少年をまた連れて行く。

ミクニ――御免・・・私・・・酷い人間になる・・・

「待ってください!」

そう言う少女は、首飾りを取った。

「待って下さい・・・これじゃあ・・・足りませんか?」

男を呼びとめまぼろは男の目の前に一つの首飾りを出す。

男は、驚いた顔をして差し出された首飾りを見た。

「こりゃあ、見事なもんだ。確かに足りるよ、釣りが何倍も返ってくるくらいの品だ」

ざわざわと民衆が声を上げる。しかし男は、首を振ってまぼろに首飾りを返した。

「お嬢ちゃんには悪いが・・・」

男が、断ろうとしたその時だった。

「いいではないか離してやれば」

凜とした声が聞こえる。まぼろは、振り返った。そこには、優麗な武士が立っていた。歳はまだ二十歳ぐらいの青年だ。艶やかな着物を着ている。武士というより遊び人と呼んだほうがあっている。男は、狼狽して男を見つめた。武士に逆らうものではない。男は、頷

きまぼろから首飾りを受け取ると少年を離した。

少年は、呆然として武士とまぼろを交互に見た。まぼろは、急いで優麗な武士に礼を言った。青年は、満足そうに妖艶な笑みを向けた。数人の見物人がほうと声を上げ青年に見惚れた。

紅葉が、近づけない様子でこちらを見ている。怯えているようにも見える。

まぼろは、包みを抱えてただ黙っている少年を見つめた。歩けないようだ。先ほど転んだ拍子に傷を足に負っている。まぼろが困っていると。武士が、懷から手ぬぐいを出してまぼろに渡した。

「有難うございます」

まぼろは、礼を言った。少年の足の手当てをしてやる。少年は、じつとまぼろを見つめていた。為すがまま黙っている。

「私・・・この子を家まで送ります。本当にありがとうございます、お武家様」

そう言うともぼろは、深く頭を下げた。実をいうともぼろも怖い――

――武士に逆らえばお手打ちもありえるからだ。

「ふむ、もう少しこの姿でいたいし――」

武士が何やらぶつぶつと顎に手をあて独り言を言っている。まぼろは、首を傾げた。

「そうだな、私もそなたについていこう。もちろん、よいな？」

武士が、覗き込んでくる。怪しい武士には逆らわないほうがいい。

まぼろは、紅葉をみた。だが紅葉は、黙ったままこちらを見てはくれない。――どうしたのだろう？

「では、行こうか」

武士は、嬉しそうに笑った。

紅葉は、心配そうにまぼろを見たがまぼろが大丈夫と頷くと紅葉も頷いた。まぼろは、歩けない少年をおぶると武士と供に歩き出した。

少年の名は小太郎といった。

小太郎は、まぼろの背の上で泣きながらずっと謝り続けた。そして、何故盗みを働いたのかぼつりぼつりと話始めた。小太郎の家族は皆捨て子や火事で親を亡くした子供たちだという。母親代わりのお志乃という女性は病弱らしく無理がたたてとうとう寝込んでしまったのだ。

「しかし、盗みは関心せんの」

武士が、呟く。少年は、俯いた。まぼろは、少年に掛ける言葉が見つからなかった。

貧しくて……でもお金が無くて

——大事な人も助けられない

どうすればいい？……迷って迷って最後には盗みを働く……まぼろと同じだ。何にも出来ない無力な自分と。

「ついたよ」

少年の家は、とても住みやすいとはいえなかった。今にも崩れそうなぼろ屋の下には水路が流れている。あのぼろ屋では雨風が凌げるのかとまぼろはふと不安に思った。

少年を下ろしてやるとまぼろは包みを持たせてやった。

「もう、盗んではだめよ」

まぼろが、言う少年は頷いた。

「ありがとう、まぼろお姉ちゃん」

につこり笑いそう言う少年は家まで駆け出した。

まぼろと武士は少年の姿を見送った。

その後武士と二人で川べりを歩いた。

ミクニから貰った首飾りを売ってしまった。つくづく馬鹿だと思う。だが、小太郎と目が合った瞬間、助けてと小さな悲鳴が聞こえてき

ただ。

「そなたとんでもない虚け者じゃの。泣くぐらいだったらその首飾りを売らねばいいだろう？」

武士が、言った。まぼろは、はっとした。いつの間にか涙を流していた。急いで溢れた涙を袖で拭いたがおさまらない。泣きやめない。つと、武士の細い指がまぼろの顎を上げた。まぼろは、驚いて動けなくなった。

武士が、袖でまぼろの涙を拭いてやる。まぼろは、慌てて後ろに下がった。恥ずかしくて顔が上げられない。

「袖が汚れます。どうか、お止めください」

武士は、ふと笑みを漏らした。

「何を照れておる。我じゃよ、もしや忘れておるまいな」

まぼろは、驚いて顔を上げた。

武士の美しい顔が不敵に笑う。

——袖の見事な蝶の柄が風に吹

かれて舞い上がる。

「……胡蝶？……」

まぼろは、口を抑えた。でも、胡蝶はもっと小さかった。・私より三つは下に見えた。

「我は、そなたとは遥かに異なった一族と言ったろう？全く、この虚けめ」

まぼろは、武士をまじまじと見た。端正な顔立ちをした青年にしか見えない。

「さあ、我と共に主の所に来い」

手を差し伸べられる。まぼろは、端正な顔の青年を見つめた。信用出来るのだろうか。

「嫌」

まぼろは首を振った。

「私には、やることはありません。だから、あなたの主の所へ行く気はありません」

胡蝶は、怪訝な顔をした。

「里を襲った者への復讐かえ？」

「違います」

まぼろは、首を振った。

「助けたい人がいるんです。それに、私の人生を他人の手に委ねる気はありません」

ほおと感心したような声を胡蝶は上げた。目が、きらりと怪しく光る。

「それならば、我も助力しよう」

まぼろは、固まった。こんな怪しい者と供にいるなんて身の危険を感じる。

「でも・・・」

まぼろは、迷った。やっぱり信用出来ない。

「そなたが、思っている以上に今のそなたは危険な状態におるのじや・・・」

「そんな・・・」

愕然とする。平和には暮らせないのだろうか？

「安心せい、我は、一族の中では一番、強いし頭もよい」

まぼろは、武士をじっと見つめた。

「信用できる？」

胡蝶は、頷く。

「我の誇りにかけて助力しよう」

まぼろは、胡蝶を見つめた。信用できるだろうか？この男を――

「あなたが言っていた。強大な力って――？」

胡蝶は、まぼろを見つめた。

「今のそなたではな、話しても悩むだけだろう。それに知らない方がいいこともある・・・」

確かにそんなこと知りたくは無い。

「私には、残念だけどそんな凄い力はないと思うわ・・・」

胡蝶は、首を振る。

「そんなことはないぞ？お前は、我が助力するに値する人間だと思うたのだから」

まぼろは、目を開いた。だから、助けてくれたのか。あの時、まぼろをほおっておくことならいくらでも出来たのに胡蝶はまぼろを見捨てずに手を差し伸べてくれた。

「ありがとう・・・」

まぼろは、素直に言った。この男ならば信用出来るかもしれない。ほとんど勘に近いものだが唐突にそう思った。

：第九話

舞台が完成してとうとう公演が始まった。

お銀を始め他の女たちを中心とした舞が主となっている。

まぼろは、婆と供に女たちの衣装の着付けの手伝いや髪を結うのを手伝った。まぼろは、見事な漆塗りの髪飾りをお銀の美しく結われた髪に挿した。

お銀は、化粧をしてお釈迦様のように美しい。鏡の中のお銀がまぼろを見て笑う。

まぼろも嬉しくなって笑った。

舞が始まった。

美しい衣装を着た女たちが扇で顔を隠している。

小太鼓の音が響く。その後を追って横笛の音色が響く。

通りを歩く人々が一人また一人と足を止める。

中心の女を残して他の女たちが舞う。美しい光景にまぼろはため息をついた。

女たちの中に紅葉もいる。まるで知らない人のようだ。

大きな太鼓を合図に中心の女は舞った。お銀だ。観衆がため息をつく。

散ることが無い美しい花たちが舞う。太鼓の音が胸に響いてくる。

音楽が終わると民衆たちは拍手をした。おひねりが飛ぶ。凄い数だ。

まぼろも何時の間にか拍手をしていた。

次の出し物が始まる頃、まぼろは婆に呼ばれて買出しに行くように言われ渋々向かった。

白粉が足りないらしい。午後の公演に備えて買ってくるように言われた。

木の上に寝ていた胡蝶がまぼろを見つけ降りてきた。武士の姿にまた化けようとしたのでまぼろは止めた。あの姿は、どうしても目立つてしまうからだ。胡蝶は、機嫌を損ねたらしく蝶に化けてまぼろの頭の上に乗った。追い払っても頭の上に乗ってくるのである意味嫌がらせだ。まぼろが、ため息をつくとき胡蝶は子鬼のようにけけと笑った。

白粉を買って帰ってくると怒鳴り声が聞こえてきた。紅葉の声だ。一体どうしたのだろう？

「だから、いらないって言ったでしょう！」

紅葉がもの凄い剣幕で鯉を持った少年に言った。少年も負けじと言う。

「お前のじゃない！まぼろ姉ちゃんのだ」

「なんだと！！」

紅葉が手を上げた。まぼろは、駆けて少年を庇った。

「止めて、紅葉！どうしたの？こんな小さな子に手を上げるなんて・

・・」

まぼろは咎めた声で言った。紅葉は、一瞬子供のように傷ついた顔をしたが直に顔を背けた。

「小太郎くん・・・どうしたの？」

まぼろは、少年を見つめた。少年はにこりと笑って手に持っていた鯉を渡す。

「これ、少ないけど御礼・・・」

大きな鯉だ。まぼろは、礼を言ってその鯉を受け取った。頭に乗っている胡蝶がうまそうと唸った。

紅葉が、ふんと鼻を鳴らした。

「何よ、罪人のくせして」

「紅葉！」

いくらなんでもそんなことを言うのは酷すぎる。まぼろは、紅葉を

咎めた。紅葉は、声を荒げた。

「なにさあんたはただ、優越感に浸りたいだけなんだ。だから、だから助けたんでしょ？」

まぼろは、紅葉の頬を叩いた。乾いた音が響く。

「紅葉—— 私のことそんな風に思っていたの？」

風がさわさわと二人の間を通り過ぎる。

「アンタたち何してんだい？」

お銀が私達に気づいて近づく。まぼろは、俯いた。小太郎は、驚いたような顔をしてまぼろと紅葉を見つめている。お銀は、心配そうな顔をして言った。

「紅葉・・・アンタ、泣いていてんのかい？」

まぼろは、驚いて紅葉を見つめた。まさか、紅葉が泣くなんて・・・

「紅葉・・・」

まぼろが、謝ろうと立ち上がると紅葉は逃げるように走り出した。

怒ったり泣いたり忙しない娘じゃの

胡蝶の呑気な声が聞こえる。

大きな鯉を見つけて子供らがきゃっきゃと喜んでいる。

まぼろは、子供らの様子を笑顔で見つめていたが一人ぼんやりと座っている紅葉を見つけた。

あの出来事から紅葉とは一度も話してはいない。紅葉が、まぼろを避けているようにも見えた。

まぼろは、紅葉の隣にそつと座った。二人で、日が大地に吞まれていく様子を見つめる。

最初に口を開いたのはまぼろだった。

「御免ね、痛かったでしょ」

思いつき叩いてしまった。まぼろは、照れながら俯いた。紅葉は、首を振った。

「叩かれて当然・・・おかげで目が覚めた」

紅葉の顔が夕日に照らされる。

「あんた・・・そういえばさ。あの後、あのお武家様に変なことがなかった？」

ほらあの遊び人風の・・・紅葉が付け足すとまぼろは、首を振った。

「平気よ、いい人だったわ」

まぼろが、笑顔でいうと紅葉は俯いた。

沈黙が、二人を包む。

「まぼろのおつとつとおつかあは、殺されたの？」

唐突に紅葉は聞いてきたのでまぼろは少し驚きながら頷いた。

「・・・うん」

そうと言って紅葉は俯いたまま履きなれた草履を見ていた。何処も擦り切れているそろそろ変え時なのかもしれない。

「私のおつとは武士に殺されたの・・・おつかあも・・・」

まぼろは、俯いた紅葉を見つめた。

「どうして・・・？」

「知らない、もしかしたら・・・ただ刀の試し切りをしたかったのかもしれない・・・」

村で父と母を待っていた小さな紅葉――町に野菜を売りに出

かけ何時も一つ飴玉を買って帰って来てくれる優しい父と母。

「暫くは親戚の家に預けられていたんだ。だけど、酷い親戚だった」
食べ物もろくに与えられず毎日野良犬のように飢えていた。

「お腹がすいてすいてしょうがなかったんだ・・・だからわたしは・・・」

紅葉の声が途中から擦れていく。いつもの紅葉ではないようだ。

「あの子と同じことをしたんだ・・・」

「紅葉・・・」

簡単だった。ただ、手を伸ばせば自分のほしいものが手に入った。でも、ある日店の店主に捕まった恐ろしかったただ恐ろしかった。同じ目をしていたあの少年と少年を捕まえたとき自分を捕まえたような気がした。

「でも、その時通りかかったお銀さんに救われたんだ」

少年を庇うまぼろはお銀さんを見ているような気がした。何故助ける？なんで――　　なんで

まぼろは、じつと紅葉を見つめた。だから、お銀さんに逆らわないんだ。お銀が頼めば紅葉は、渋るが絶対に断ることはしなかった。紅葉が、顔を上げまぼろを見つめた。

「なんで、助けるの？お銀さんもあんたも・・・私ずっと知りたかった・・・なんでお銀さんは私を助けたのか・・・」

まぼろは、少し考えて紅葉に言った。

「悲しいじゃない・・・誰かが自分の目の前で不幸になるのは、だから私は・・・」

あの時何故ミクニに貰った首飾りを差し出してまであの少年を救おうとしたのか自分でも分からない。

でも、動かずにはいられなかった。

「傲慢だけとお銀さんもそうだったんじゃないかな」

不幸を知った――　　だから、人の不幸が身にしみて分かるようになった。

でも、やっぱりこれは傲慢だ。不幸な人皆助けられるわけではないのに――

「単純な理由・・・でも案外そうかもしれないね」

紅葉は、頷いた。

「あの子にも謝らなくちゃ、罪人だなんて言っで・・・ちゃんと反省してなきや、礼なんてしてこないよね」

うんとまぼろも頷く。

夕日が、大地に飲み込まれた。

第十話

次の日まぼろはお銀に呼び出された。

どうやら餡蜜を食べさせてくれるらしい。まぼろは喜んでお銀について行った。

まぼろが、餡蜜を頬張っていると。お銀が、笑いながら言った。

「まぼろ、舞台にアンタも出てみないかい？」

驚いてまぼろは、口を開けた状態になった。

「無理です!!!」

お銀は、笑った。

「そう言うと思ったよ、だがね、アンタは断れないよ」

そう言うとお銀は懷から何かを出した。

「それは
.....」

お銀が懷から出したのは売ってしまったはずの首飾りだった。驚いて声が出せないまぼろにお銀が首飾りを手のひらに乗せてくれた。まぼろは、首飾りを抱きしめた。

ああ、良かった。……ミクニ御免ね……

・ミクニ
まぼろは心の中で何度も詫びた。お銀の、
優しい声がする。

「紅葉がね、教えてくれたのさ。アンタ、馬鹿だね。他人の為にそこまですることないのさ」

でもねとお銀が付け足す。

「アタイはアンタみたいな馬鹿が好きなのさ。それに気に入った」顔を上げるとお銀の美しい顔があつた。

「紅葉の話を聞いてやってくれてありがとうね」

優しく笑うお銀の笑みは何処かで見たことのある笑みだった。

そうか――まぼろは、思い出した。

（お銀さん、かかさまのような笑い方をする）

まぼろに、暖かい笑みを向けてくださる。かかさまのその笑みに似ている――

「で、アンタはこれでもアタイの頼みを断るのかい？」

お銀は、挑戦的な笑みを向けた。

まぼろは、頷いた。

何事もやってみなければ分からない。それに、舞は初めてではない。その夜――舞台が終わってからまぼろは、お銀に連れられて舞台の上に立った。

「お前は今日から楓と稽古するんだ」

楓と呼ばれた少年は、まぼろの前に進み出た。少年は、無言でお辞儀をした。まぼろも慌ててお辞儀をする。

「楓は、吹手でお前と同じ舞台に立つ」

お銀は、腕を組みながらまぼろと楓を見つめた。

「これから、三日後の舞台でお前たちを出す」

まぼろは、声を上げた。

「三日後！？」

お銀は、頷いた。

「アンタたちだけで舞いを完成させな。アタイは一斉口を挟まないからね」

：第十一話

あれから、二日経ってしまった。昨日はずっと楓と一緒に練習をしていた。

だが、練習といってもまぼろが一人で乙女の舞いを舞っているだけなのだが。

楓は、まぼろが舞う様子をじっと見ているだけなのだ。

今日の練習もずっとまぼろが一人舞い続けている。

しかも昨日と違って楓は一向にまぼろの舞を見ようとしない。木陰で寝ているのだ。

まぼろは、飽きれて楓に言った。

「楓さん、お願いです。一度でもいいから私に合わせて笛を吹いてください」

楓は、ちらりとこちらを見ると大して興味のなさそうに寝返りをうつた。

「楓さん!!」

まぼろは、耳元で怒鳴ったが楓はびくりとも動かなかった。

「分かりました」

まぼろは、その場に正座した。

「楓さんが笛を吹いてくれるまで私はここから動きません」

どっかりとその場に構える。楓は、ため息をついて立ち上がった。

「どうして、笛を吹いてくれないんですか？」

まぼろが、聞くと楓は淡々と答えた。

「だって君の舞いになんにも興味が湧かないから」

まぼろは、啞然として楓の背中を見つめた。

茶屋でそのことを話すと楓は笑った。

「そりゃあ、そうよ。楓は、変わり者だから」

私にだって土下座しても舞に合わせて笛を吹いてくれないのよ。そう言つと何か嫌な事でも思ひだしたように楓はぐいっと茶を飲み干した。

「まぼろは、いいほうよ。二日間は一応見てたんでしょ、楓の奴、まぼろの舞いを」

まぼろは、頷いた。

「でも、興味ないって……」

しおらしく項垂れるまぼろを紅葉は優しく笑んで見せた。

「それに、まぼろなら大丈夫な気がする」

「なんで……？」

「まぼろには、何か人を優しくさせる力があると思うから」

紅葉の言葉にまぼろは、目を丸くした。驚いた、紅葉がそんなことを言つなんて……

「なによ、その顔は——」

まぼろが、まじまじと紅葉を見つめていると紅葉が手を上げた。

（ありがとう、紅葉）

まぼろは、心の中で紅葉に礼を言った。

お陰で気持ちが少し楽になった。まぼろは、紅葉と別かれると楓のもとに向かった。

しかし、楓は何処にも見当たらなかった。

まぼろは、ため息をついてその場に座り込んだ。どうしたら、いいのだろう。舞台に立つのは明日なのに——お銀さんは、

何故私を選んだんだろう……

まぼろが、落ち込んでいると上から呑気な声が聞こえてきた。

「どうしたんだよ、まぼろ」

胡蝶だ。胡蝶が木の上からまぼろを見下ろしている。

「うつん、別に何でもないよ」

まぼろは、笑った。胡蝶に相談しても何も変わるまい。

「それよりどうしたの？いつもと話しかたが違う気がする」

まぼろが、聞くと胡蝶は嬉しそうな顔をした。

「気づいてくれた？民草の話し方に合わせてみたんだ。だって俺人間の傍に長くいたことないから興味のあることばかりだし」

まぼろは、納得した。だから、最近姿を見なかったのか。

「舞いのことで悩んでんだろ」

胡蝶は、にやりと笑った。まぼろは、少し間をおいて頷く。

「どうしたらいいか分からないの、楓さんには興味が無いって言われてしまうし・・・」

俯くまぼろを見て胡蝶は、地面にふわりと着地した。まぼろの近くへ座る。

「俺が見た限り問題なのは舞いじゃなくてお前自身だ」

まぼろは、胡蝶を見つめる。

「私自身――？」

胡蝶は、頷いた。

「だって、まぼろ舞いを舞ってる時上の空だろ？別のこといつつも考えてる」

「そんなこと――」

まぼろは、口ごもった。確かにそうかもしれない。

「まあ、本来まぼろは舞いを舞ってる場合じゃないんだけどな」

そう言くと胡蝶はごろりと寝そべった。沈黙が流れる。

「なあ、主の所へ行く気になったか？」

「なりません」

きつぱりとまぼろは言った。胡蝶は、ため息をつく。

「まあ手っ取り早いのは、自分に聞いてみることだ」

「無理よ」

まぼろは言った。胡蝶は、怪訝な顔をする。

「出来るって・・・しょうがないな、俺が手伝ってやる」

そついうと胡蝶は起き上がり懷から横笛を取り出した。

まぼろは、驚いた。

「吹けるの？胡蝶・・・」

胡蝶は、笑った。

「意外か？まあ、嗜み程度にはな」

そういつてまぼろに横になるように言う。

「俺が、誘導してやる。お前は笛の音についていけばいい」

胡蝶の手がまぼろの目を覆った。真っ暗になる。胡蝶の手は少し冷たくて気持ちがいい。

手が離れる。暫くすると笛の音が聞こえてきた。

（あ……綺麗な音色……）

一瞬、胡蝶が楓の変わりに吹いてくれればいいのではないかという考えが浮いてきたがまぼろは、その考えを打ち消した。

（今は、集中しなくちゃ……）

集中、集中——まぼろは頭の中で念仏のように唱え続けた。

：第十二話

まぼろは、何時の間にか闇の中を駆けていた。

あの日――ととさま、かかさまが殺された――皆が

早く逃げなきゃ――影が……あいつらが来る――

里に火がついている。ああ、やっぱり

里の人々が倒れている。優しい人々――切られて
血を流している。

まぼろの足が勝手に動く。いやだ――いやだよ。神殿には――

――神殿にはととさまとかかさまが

体の自由が利かない。

しかし、神殿にはかかさまやととさまの亡骸はなく。一人の少女が
顔を覆ってしゃがんでいた。

乙女の舞いの衣装を着ている。火の光に照らされて白い衣が天の川
のように輝く。

まぼろが、立ち尽くしていると笛の音が朗々と響き渡ってきた。

少女は顔を上げる。笑った女の顔――能面を被つてい
る。

少女は舞う――あの日私が舞うはずだった舞を

笛の音が激しく早くなってくる。少女の舞も激しくなってくる。

笛の音が切れる――大地に響き渡る。それを合図にしたよ
うに少女は倒れた。

びりびりとした緊張感が消えまぼろははっとして少女に駆け寄った。

「あなた——大丈夫？」

少女は、頷いてまぼろの差し出された手をとった。

「どうして・・・こんなところに・・・？危ないわ」

まぼろは、少女を見つめた。少女の面には一房の髪が垂れている。

「どうして？」

「だって、大帝の兵が——里を・・・。」

少女は、首を傾げた。笑ったままの能面が怖い。

「だって私達助かったじゃない」

「え・・・。」

辺りを見渡す。ここは、旅一座の舞台の上——そ

うか、私助かつたんだ。

まぼろが、ほつとすると少女は、やけに幼い声で呟く。

「あーあ、やたかについていけば良かったなー」

少女は、大げさにため息をついた。

「・・・なにを・・・。」

「やたかなら、頼りになるし・・・もしかしたら、大帝に復讐してくれるかも」

まぼろは、後ずさった。

「なにを、言っているの？」

「舞だつてほんとは気が進まないし、止めたいなー」

「止めて」

「大帝のせいだよ、私がこんなことになったのは・・・殺したいくらい」

「やめて」

「ミクニのことだって本当は——」

「止めてえ！！！」

まぼろは、耳を塞いだ。

「助けられないって諦めてるくせに」

まぼろは否定した。

「違う！！そんなこと・・・思ってない！」

少女は笑った。不気味な笑いが響き渡る。

「あなたに私の何が分かるの？」——私の苦しみが・・・あなたに・・・」

少女の笑い声が止まった。まぼろを見つめる。

「分かるよ、痛いほどに」

面をとる——髪がさらりと揺れる。顔——見
覚えのある顔・・・

「だって私はあなただもん」

そこには、私の顔があった。

私は、愕然としてその顔を見つめる。

（これが——もう一人の私・・・？）

憎悪、妬み、狂気、人間の隠れた部分——もう一人の
自分・・・

もう一人の私は私の腕を掴んだ。痛い——なんて凄い力

「あなたは、偽者——わたしが本当のわたし・・・」

まぼろは、首を振る。

「そんなわけない・・・私は・・・」

だって私は知っている。人の温もりを——あの暖かさを・・・

「違うわ・・・私は本物・・・あなたが、偽者よ！！」

まぼろが、叫ぶともう一人の私の顔が歪む。

「お前は偽者なんだよ！」

つき飛ばされる。思った以上の力にまぼろは、倒れた。
「うう・・・」

ゆっくりと起き上がる。がちりと音がする。鏡だ。私が砕いた八咫の鏡——手が切れて血だらけになる。

「お前、ばっかりずるいんだよ！偽者ー、里が襲われた日から抜け出してのうのうと生きてる」

もう一人の私の顔が鏡に映る。怖い顔
嫉妬、憎悪・

・・・

私の顔が鏡に映る。怯えている顔

恐怖、絶望・・・

もう一人の私は鏡を拾い上げた。にたりと笑う。

「偽者は消えてよ」

歩いてくる。もう一人の私が近づいてくる。私は、いやいやをするように後ずさる。私が、近づく。私は後ずさる。転んでしまう。もう一人の私はにたりと笑うと鋭い鏡の破片を振り上げる。きらりと鏡が光る。

振り下ろす。

まぼろは、悲鳴を上げた。

：第十三話

まぼろは、悲鳴を上げた。魂を切り裂くほどの

「大丈夫かい？」

目をあげるとそこにはお銀と楓がいた。

お銀は、心配そうにまぼろを撫でた。まぼろは、頷いた。涙がぼろりと落ちる。

「楓が、倒れているアンタを見つけてくれたんだよ」

楓を見る。顔を背けていてよくは見えない。

まぼろは、起き上がるうとした。だが、手に激痛が走る。

「なんで・・・」

手には、包帯が巻かれていた。血が滲んでいる。

「大丈夫傷は残らないよ」

お銀が、悲しそうな顔をしてまぼろの手を包んだ。

「無理を言ったね、今日の舞台降りてもいいんだよ」

今日？ ———— では、一日寝てしまったのか。まぼろは、目を伏

せた。沈黙が包む。

「少し・・・考えさせてください」

まぼろがそう言うとお銀は静かな声でそうかいとだけ言った。

「寝な、今はそれが一番だ」

まぼろが、頷くとお銀と楓は外へ出て行った。

まぼろは、一人布団の中で蹲った。

怖かった

——— あんなの自分じゃない・・・

・ 「胡蝶、あれが・・・私なの・・・？」

いつの間にか胡蝶がまぼろの傍にいた。

「そうだ」

声が、聞こえる。胡蝶の声。

「無理に引き合わせたのがいけなかった。もう一人のお前は、まぼろ・・・お前を殺すだろう・・・」

「そんな、こと出来るの・・・？」

胡蝶は、頷く。

「人間誰しも心の中には陰と陽のように二つの心がある。争うことになれば、どちらかが消える」

まぼろは、愕然とした。自分が自分に殺されるなんて考えられない。

「胡蝶・・・嫌だ・・・私・・・怖い・・・わたし・・・あんなに・・・」

少女の顔を思い出す。怖い顔
私を本当に憎む顔、妬む顔。

「殺されるなんて、それに私・・・なんて醜い・・・」

私は、人を本当に憎んだことなんてないと思っていた。

大帝に復讐したいと思ったことはある。でも、私は大帝を許したつもりだった。

それよりもミクニを救いたいと思っていたのに・・・

でも、本当の自分は・・・大帝に復讐したくてしなくてはしづがなかった。伝わってきた。憎しみが・・・

本当の自分は、ミクニのことを諦めていた。胡蝶は、まぼろをじっと見ていた。まぼろは、続ける。

「私は、本当の私は凄くずるくて・・・自分勝手に・・・醜い・・・もう、嫌だよ・・・こんな私・・・」

まぼろは、そう言つてすすり泣く。胡蝶は、まぼろの震える背中を見つめながら呑気な声でいった。

「お前、馬鹿か？当たり前だ。人間が自己中心的で野蛮なのは、今

から始まったことじゃない。恥じることはないんだよ、馬鹿者。それが、お前ら人間なんだから」

まぼろは、驚いて胡蝶を見た

「なんだ、驚いていてんのか？安心しろ。嫉妬、憎しみがあるのは普通なんだよ、お前は、全部背負い込みすぎだ。俺は言つたろう？助力すると、少しは俺に頼れ」

まぼろは、胡蝶を見つめた。胡蝶の髪が灯籠の光で透けて綺麗な淡い緑色に見える。

「胡蝶の髪……淡い緑色なんだね……凄く綺麗……」

胡蝶は飽きれる。

「なんだ、今頃気づいたのか……馬鹿者」

まぼろは、膨れた。

「馬鹿、馬鹿つて言わないでよ。自分が、本当に馬鹿に思えてくるから」

胡蝶は、鼻を鳴らした。紅葉みたいだ。

「まぼろは馬鹿者だ、大馬鹿者だ。何故、自分をそんなに恐れる？」
まぼろは、俯いた。

「だって……私を殺そうとしたんだよ？……怖いよ……それに、やっぱり嫌だよ……あんなに醜い自分……やっぱり嫌い……」

胡蝶は、笑った。

「俺は、そうでもないぞ」

まぼろは、驚いて胡蝶を見た。

「醜いまぼろのほうがいける楽しそうだ」

まぼろは、むっとして言った。

「何よ、いろいろって……」

胡蝶は、笑う。本当に天邪鬼なんだから……まぼろは、心の中で呟いた。

「恐れることはないさ、もとは一つの魂なのだから。どちらのお前もお前なんだから」

「変わってしまったかもしれないよ、私が私じゃなくなるかもよ?」

「変わらないよ、意思を強く持てば」

まぼろは、胡蝶を見つめた。胡蝶の優しそうな顔初めて見る。

「それに、まぼろはまぼろだろ?」

天邪鬼が優しく笑う。これは、本当の笑みなのかそれとも……

楓は、少し後悔していた。

だが、吹きたくないものは吹きたくないんだから仕方がない。

少女の親は、殺されたという話を聞いた。

親が殺されたら悲しいものなのか自分ではあまりぴんとこない。

楓の親は、お金のために楓を売った。楓はそれから金持ち売られてこき使われた。

夜眠れないとき誰かの笛の音がよく聞こえた。笛の音色が子守唄のように毎日聞こえてきた。

美しい音色だった。耳に焼き付いて離れなかった。

ある日、旅芸人がやって来た。笛の音色が聞こえてきた。

「やってみるか?」

見ていたら吹手の男にそう言われた。頷いた。少し吹いてみる。楽しい……あの歌を奏でて見る。

「お前、本当に始めてか?」

男は、驚いた顔をして楓を見つめる。楓には、吹手の才能があつた。それから、楓は旅芸人たちと一緒にいる。

笛を吹くのは誰の為でもない自分のためだ。何故他人の為に合わせて吹いてやらねばならない?

「あの」

気がつくと少女が近くに立っていた。少女は、意を決したような顔を見ると頭を下げた。

「私、やっぱり舞台上で舞います。迷惑をかけて……御免なさい」

少女は、そう言つと笑つた。楓は初めて笑顔を見たと思つた。

：第十四話

まぼろは、舞台に上がった。人々がこちらを見ている。平民も貴族も関係なくただ舞いを楽しみにしている。

深呼吸をして心を落ち着かせる。足音がする。もう一人の私が舞台に上がってくる。

来た

——— と思った反面来ると思っていた。

反対側からもう一人の私が歩いてくる。私と同じ衣装を纏っている。違いといえば少女が般若の面を被っていることだ。

まぼろの後ろにいる楓にも観衆にも少女は見えていないようだ。

まぼろは、暫く少女を見つめ、観衆の方を向いた。

笛の音を待たずにまぼろは舞い始める。暫く般若の面を被った少女も舞い始めたまぼろを驚いた様子で暫く見つめていたが、前を向いてまぼろに倣った。

二人の少女が舞う

——— ぴったりと合っているまるで

乱れない。

（私は、私なのだから）

まぼろは、舞う。集中する。

人々の口から感嘆の声が漏れる。それほどまでに美しく力強い舞い

——— 見たことが無い

——— 団員たちまで

まぼろの舞いに見惚れた。笛の音もないまま舞う一人の少女を見つめた。

つと笛の音が聞こえる。深く

——— 心を打つ音色

楓は、何時の間にか笛を手にして吹いていた。

吹かずにはいられなかった。

「まぼろお姉ちゃん、天女さまみたい」

見ていた子供らがぼつりと言った。

紅葉も頷く。笛の音に合わせ舞うまぼろは地上に降り立った天女のようにだ。

皆は、ため息をついた。こんな、素晴らしい舞手はいままでに見たことがあつただろうか？

笛を、吹いている楓でさえも思うず見惚れてしまうものだった。

でも、なんと悲しい舞だろう。羽衣を奪われて天に帰れなくなった天女のように少女は舞う。

笛の音が止む——まぼろの動きが止まった。終わったのだ。

だが、皆立ち尽くしている。

誰かが、手を叩いた。皆もはつとしたように手を叩く。

まぼろは、肩を上下させ息を吸った。

もう一人の私も肩を上下させている。

まぼろは、小さな声で言った。

「御免ね、私・・・あなたから逃げてたの・・・恐ろしいことから目を背けて逃げていた。・・・ずるくて醜いのは私だったんだよね・・・あなたはいつでも立ち向かっていたのに・・・」

二人は見つめあった。般若の面が音をたてて崩れていく。少女の顔が覗く。少女は笑っていた。

——いいのよ、だってあなたは私だもの

もう一人が、消えていく。

——いつだって私達はひとつ

まぼろは、頷いた。

拍手は、ずっと鳴り止まなかった。

この後、まぼろは舞台で舞いを見せるようになった。その舞は評判となり人々の噂にのぼるようになった。

：第十五話

それから、いろいろな町へ行き村へ行つた。まぼろの舞は噂に上り商人たちはまぼろをこぞつて座敷に呼んだ。まぼろは、舞いを舞うたびに人々の噂の的となった。

しかし、どの町でもどの村でもミクニの名を知っている者はいなかった。

この日は、初めて武家屋敷へ招かれた。

婆様からおろしたての衣装を貰う。

「わしがこさえたものじゃ、今日はこれを着ていきなされ」

まぼろは、嬉しくて老婆から貰った衣装を抱きしめた。真っ白な美しい衣――

「この主はとてもいい隠居様のようだよ、そうだ、玉の輿でも狙おうかね」

お銀がそう言うのと婆様はお銀！と一喝した。お銀は、舌を出して笑う。まぼろは、お銀の美しい顔をぽおつと眺めた。お銀は、衣装を着て化粧をしている。ふと、声が聞こえてきた。

いやあ、お銀さんは色っぽいや本当にさ

まぼろは、同意しようとしたが硬直した。

ん・・・・・・・・？この声は・・・・・・・・

「胡蝶・・・・・・・・！・・・・何処にいるの？」

最近、胡蝶は前より人らしくなったような気がする。胡蝶は、けけけと笑うとまぼろの肩に止まった。蝶だ。美しい青い蝶だ。

おっ？まぼろも褒めて欲しいのか

まぼろは、少し顔を赤らめて蝶を追い払った。胡蝶は、慌てて退散する。

おお怖、まぼろのその大きな手で俺の美しい体が潰されたら大変だ

「悪かったわね、大きな手で」

まぼろは、拳を上げた。胡蝶は、まぼろの拳をひらりと避けると外に優雅に飛んでいった。

「何やってんの？」

紅葉が、飽きた顔で見つめてくる。まぼろは、赤面して何でもないと笑った。

武家屋敷の主は、とても人の良さそうな御老人だった。

まぼろは舞いを舞った。御老人は、立派な白い髭を手で触りながら黙って舞を眺めていた。

舞が終わるとまぼろたちは酒を振舞われた。まぼろと紅葉は、もちろん断った。

その夜は、楽しい夜だった。

「噂通り素晴らしい舞だった、感服した」

御老人は、そう言う酒を煽った。婆様が、代表してお辞儀をした。

「舞手と吹手に話をしたいのだが、いいかね？」

「まぼろ、ご隠居様にお酌を」

まぼろは、頷いてご隠居様の近くへ座りお酌をした。楓は、まぼろの後ろに座った。

老人は、嬉しそうに酒を飲んだ。

「今宵は久しく愉快じゃ、お主もどうかの？」

ご隠居は楓に杯を渡した。楓は、頷いてお酌を受ける。杯を傾けた。旅芸人の一行はこの素晴らしいご馳走や酒に暫し酔いしれた。次々と繰り広げられる芸にご隠居は大いに楽しんでた。頃合になってまぼろは、ミクニのことを聞いてみた。

「ご隠居様、つかのことお聞きますが、ミクニという方を知っていますか？」

唐突に言われてご隠居は目を丸くした。

「探し人か？ミクニ・・・聞いたことの無い名じゃ・・・」

まぼろは、がつくりと肩を落とした。ミクニは囚われ人情報もないのは仕方がない・・・

「いや、待て……その名……」

まぼろは顔を上げた。老人は、暫し思案顔をしていたが思い出したと嬉しそうな顔をした。

「そうじゃ、確か武家の片倉勝家という男の嫡子がそのような名だった気がする……おお、そうじゃ。ミクニなどど珍しい名をつけているので覚えておったわい」

まぼろは、老人に礼を言った。――きつとミクニに違いない……

しかし、老人は少し渋い顔をした。

「確か、ミクニ殿は床に臥せっておいでと聞いた」

まぼろは、どきりとした。――ミクニが……？

場所を知りたい。まぼろは強くそう思った。

「勝家殿は何処に？」

「うむ、都にお住まいと聞いた……して何故そのようなことを？」

まぼろは、顔を強張らせた。しまった。怪しまれても仕方がない。

「申し訳ございません……」

まぼろが、頭を下げて謝ると老人はにこりと笑った。

「まあ、よい。しかし、興味本意で何処で聞いたかしらんがミクニ殿の名を口にするのではないぞ。それでなくとも戦が始まるうとしておるのだから、隠密だと思われその場でお手打ちということもある」

まぼろは、生唾を飲み込んだ。もつと考えて行動するべきだったのかも知れない……

楓が、不思議そうな顔をしてまぼろを見ていたのでまぼろは慌てて平気よと言って笑った。

「少し風に当たってきてもよろしいでしょうか？」

「うむ、わしの自慢の庭を見てくれ」

ご隠居は笑った。少し酒の匂いに酔ったらしい。まぼろは、外へ出た。

確かに自慢の庭ということだけは美しい。池には見事な錦鯉がいる。

胡蝶の声が闇の中から聞こえてくる。

「まぼろのやりたいことってそのミクニって奴を見つけること？」

まぼろは、頷いた。

「何、そいつ・・・もしかしてまぼろのいい人？」

胡蝶はまぼろの隣に降り立った。にやにやと嫌らしい笑みを浮かべている。

「残念、違っわ。可哀想な人なの・・・死なせたくはないわ」

「じゃあさ、やりたいことが終わったら主の所へ一緒に来てくれるか？」

無邪気な胡蝶はまるで子供のように可愛らしい。まぼろは、笑った。

「ええ、いいわ」

「ええ！！本当か？言ってみるもんだな」

胡蝶は、素直に喜んで飛び上がった。

「ただし、もしミクニに行く所が無かったらミクニも一緒よ」

「うへえ、野郎連れかよ・・・まあ、いつか」

胡蝶が、地面に降り立った瞬間だった。

「うぎゃあ」

突然胡蝶の叫び声が聞こえ姿が消えた。

「胡蝶・・・？ねえ、胡蝶ってば・・・」

まぼろは、声をかけたが胡蝶の声は返ってはこない。

（先に宿に帰ったのかしら・・・）

まぼろは、首を傾げた。しかし、宿に帰っても胡蝶の姿は無かった。

まぼろは、その夜眠れず胡蝶を探しに出かけた。

：第十六話

「胡蝶——！！」

通りを探したがただ声が響くだけだった。

「いつもは呼べば現れるのに……」

真つ暗な夜に一人——行灯の火だけがまぼろに勇気を与えてくれた。

まぼろは、探し続けた。しかし、声だけが空しく響く。まぼろは、歩いた。

可笑しい——こんなに歩いているのに人一人にも

出くわさないなんて……

じやりじやりと歩く音がする。

私の足音じゃない。

一つ

二つ

三つ

足音が前のほうからやってくる。行灯がぼつと三つ浮かび上がる。

まぼろは、立ち止まった。動けない

耳鳴りが酷い……

「やあ、こんばんわ」

薬売りの格好をした男が言った。顔は笑っているが目は笑っていない。

まぼろは、反対方向へ逃げ出した。誰かとぶつかる。まぼろは、転んだ。

「やっと見つけた——主に報告しなければな」

まぼろを見下ろしながら武士の格好をした男が言った。

「ミツケタ、コンドハニガサナイヨ」

武士の隣にいる大工の格好をした体格のいい男が言った。

(こいつら……)

忘れるはずが無い……この声——奴らだ……

影たちだ……

まぼろは恐怖で動けない。

「くく……たまらんな……なあ、主は娘の腕をもいだら怒るかな？」

薬売りがまぼろの腕を掴む。

「美しい目をしておるこの娘——目が欲しい」

武士が、まぼろの目を覗き込む。

「ジャア、アシモラウ」

大工は、唇を舐めながら言った。

まぼろは、ぞつとした。夢では、無いのかこれは——夢

では……夢なら覚めてほしい——ま

ぼろは、目を瞑った。

(大丈夫——胡蝶は来てくれる……)

まぼろは、何度も胡蝶の名を心の中で呼んだ。

「胡蝶——助けて!!」

まぼろが、叫んだその時だった。

風が通り過ぎる。花の匂いが微かに香る。

「ぐああ」

影たちの声が聞こえまぼろを束縛からといた。

まぼろは、目を開けた。

無数の蝶が月に照らされて光っている。蝶に金剛石が散りばめられ

たようにきらきらと輝く。

まぼろは、目を見張った。

「胡蝶！」

蝶が消えていく。月夜に照らされるは妖艶に笑う異形の者——

まぼろは、口を抑えた。いつもの胡蝶ではない。胡蝶は、少年の姿

を保っていなかった。美しい蝶の翼を広げている。まぼろは口を抑えたが小さく悲鳴を漏らした。

胡蝶はまぼろを庇うようにしてまぼろの目の前に降り立った。

「胡蝶——その姿は・・・？」

胡蝶の目は、髪と同じ美しい緑色をしていた。

「後で話すよ」

影たちは、むくりと起き上がった。もう、人間では無かった。闇を集めたような体——永遠の闇の囚人——なんて哀れなんだろう。

胡蝶は、影たちに飛び掛った。脇差から剣を抜いて影たちに浴びせる。だが、影たちは怯まない。

一気に飛びかかり胡蝶を押さえつけた。胡蝶の翼を持つと翼を引き裂いた。びりびりと生々しい音が響く。胡蝶は咆哮した。一体を真っ二つにする。

まぼろは、一人立ち尽くしていた。何が起こっているというのだ？ 足が震えて動けない。このままでは、胡蝶が死んでしまう。私が——

足手まといの私がいるから・・・・・・

（強くなりたい——もっと強く・・・もう、大切な人をなくさぬように・・・）

意思が強くなるたび胸の辺りが暖くなる。光だ——

——なんて清浄な光・・・・・・

まぼろは、影たちに歩み寄った。影たちは、まぼろが放つ光に明らかに怯えている。

——こっちにくるな・・・・・・やめろおお・・・

なぜ・・・何故お前のような小娘

に強大な神の力が操れる

ブシイヨオ

マブシイ……マ

「まぼろ……」

胡蝶は、まぼろに道を譲った。胡蝶の姿が少年の姿に戻る。

まぼろは、なおも影たちに歩み寄った。

（怖くない……なんて暖かい光……）

あなた達に生きる理由などあるのだろうか？暗闇のなかあなた達に手を指しのべてくれる光はあるのかしら。

まぼろを包む光がなお強まる。まぼろは、悟った。自分の中にある
力

陰を退ける陽の力

八咫の鏡に宿っていた力が私の中に宿っている。
神道を疑ってはならない。信仰を失えばそれは神を失うということだ。

里爺様の言葉が蘇る。

里では、あんなに天津神を信じて祈っていたのに——私は、
何時の間にか天津神を失っていた。

今なら感じる天津神の力を——
光が強くなる。影たちが消えていく。

くそう、退くぞ

そう言つと影たちは消えた。まぼろの光も段々と弱まっていく。まぼろは、急に眩暈がしてよろめいた。ふつと体が軽くなる。

「あっ・・・」

胡蝶が、まぼろを抱えて軽々と屋根の上を飛んだ。まぼろは、驚いて胡蝶に抱きついた。

「まぼろ、まさかお前が選ばれるなんて・・・」

「えっ・・・？」

胡蝶は、渋い顔をした。

：第十七話

「全部話す、覚悟決めて聞くんぞぞ」

まぼろは、頷いた。

胡蝶は、神社の上に降り立つとまぼろを神社の中に入れた。

「大丈夫だ、結界を張った。奴らには見つからない」

蠟燭に火をつけながら胡蝶は言った。狐が蠟燭の光に照らされて不気味に見える。

「お前は――八咫の鏡の器として正式に選ばれたんだ」

「――八咫の鏡？」

胡蝶は、頷いた。

「そつだ、お前は八咫の鏡の器――」

「器……」

まぼろは、目を伏せた。あの時だ――あの時の光……

「大帝がまぼろの里を襲うことを危惧した俺の主は、俺に見張るように言っただんだ」

「じゃあ……胡蝶は……」

里が襲われるのを見ていたというのか。まぼろが、黙っていると胡蝶はつと眉を上げた。

「俺の力でどうこう出来る問題じゃなかったんだ、まぼろ頼むからそんな顔するなよ」

まぼろは、俯いた。

「御免……」

胡蝶のせいではない。私だってもし胡蝶の立場だったら何もしないのが一番だと思うから……

「案の定、大帝は動いた。里を襲い鏡を奪った――だ

が、それはまっかな偽者……」

まぼろは、頷く。

八咫の鏡をすり替えたのはやたかだ——今一体……どうしているのだろう。

胡蝶は、話を続ける。

「俺は、あの時お前は光の中で消滅したと思った。だが、まぼろ・
・お前は生きていた」

まぼろは、頷く。

「主は、お前を屋敷に連れてくるように言っただ。お前に宿っている不安定な八咫の鏡の力を取り出す為に……」

胡蝶は、頭をかく。

「これから、話すことは今の状況だ。武家屋敷の庭で話している途中で俺消えたる？あの時ちょうど主の屋敷覆っていた俺の結界が破られたんだ。それで、俺とばかり食らって力ほとんど取られちゃった」

「だから、消えちゃったんだね」

まぼろは、合点した。

「まぼろが、俺の名呼んでくれて良かった。言霊ついていてな、言葉には力が宿ってる。特に名前とか強く力が宿るもんなんだよ。そのおかげで少しは力を取り戻した俺が登場って訳」

「胡蝶、御免ね……私のせいで怪我して……」

胡蝶は笑った。

「いいんだよ……そんなことより、まぼろは選ばれたんだ。八咫の鏡の器に——」

まぼろは、頷いた。そして、悲しそうに笑う。

「もう、あそこにはいられないね……お銀さん、婆様……皆は巻き込みたくはないから……」

「そうだな……俺もまぼろ以外の人間を守る義理も無いしな」

胡蝶は、暫し考える素振りを見せた。

「それで、それからどうするつもりだ？」

「ミクニを助けに行くわ」

そうか、と言うと胡蝶は立ち上がった。

「まあ、俺の主は死んだかもしれないし、今俺は晴れて自由だ」

まぼろは、はっとして顔を上げた。そうか、胡蝶は主に言われて私を助力するように言われていて・・・まぼろは、顔を俯いた。これ以上、関係のないことにつき合わせられない。

「なんてな、言っただろ？ 誇りにかけて助力するって、とことん付き合うよ、まぼろの行く所全部」

それに面白くなりそうだし胡蝶はけけけと笑った。

「胡蝶・・・」

まぼろは、出てきた涙を拭いた。

「ありがとう・・・」

まぼろが、礼をいうと胡蝶は笑った。

「安心するのはまだ早い、影を操ってお前を襲ったのは大帝じゃない。もっと恐ろしい奴がお前の力を狙っているんだ」

その者の名は黒椿

闇に囚われし影を操る者

：第十八話

かつてやたかと呼ばれていた少年は、闇の中で目を開けた。
黒一色の世界に自分だけが色を持っている。

火が灯る。道を作るように赤い暖かい色が灯っていく。
映し出されたのは黒石が、敷き詰められた部屋。

いや、部屋というよりは広間と言ったほうがいいだろう。
あまて

天風・・・天風・・・おいで・・・

声がする

燭台の火が揺らめく。

低い声

優しいな声・・・・・・

天風と呼ばれた少年は、燭台が灯す道を歩き出す。
そして、跪き頭を垂れる。

「我が主君」

天風の前にはまるで主と僕を隔てるように水が流れている。
黒石の色を映して真つ黒な水が流れている。

主は、簾が掛かっていてどのような顔をしているか分からない。悲
しい顔を為さっているのか怒っていないさるのか

長年仕えている天風にも分からない。

影を、琥珀のもとへ送ったが・・・彼奴め・・・

すんでのところで逃げおったわ

くくくと笑い声が聞こえる。

炎が揺れる。暗闇の中から怯えた声が聞こえる。

ふっと暗闇から現れたのは、三つの影

青白い顔を

浮かべ頭から顔だけ残し漆黒のマントを被っている。

三つの影たちは明らかに怯えている。

に入れそこなつたそうだな

蛇骨、蝙蝠^{かわほり}、火尾^{かび}・・八咫の鏡、を手

闇に浮かぶ無数の影たちの怯えた声が聞こえる。
蛇骨は、慌てて言った。

「お許しを・・ですが、あの娘・・八咫の鏡の力を使いまして・・
・私どもでは齒が立ちませぬ・・それに琥珀の僕らしき者が邪魔
をしてきまして・・」

ほおと、感心したように声が聞こえる。

・・では、その娘・・・新たな八咫の鏡
の器・・ということか

天風が、はっと驚いたように顔を上げる。

天風の主は笑い始めた。心から楽しんでいるように奥底から声をだ
して笑っている。

くくくと余韻を残し男は言った。

面白い・・・・未熟な小娘が・・我に齒向
かおうというのか・・まあ、良い・・琥珀の手の者が娘の近くに
いるとすれば彼奴とも時期決着がつくだらうよ

影たちに下がれと男がいうと影たちは消えていった。気配が無くな
る。

天風は、何の感情もない瞳を主に向けた。

私はこれから宮へ行く……儀式
の件滞りなく進めるのだぞ……天風……

「御意」

天風は、立ち上がると突然起こった突風と共に消えた。
しんと静まり返った広間は、まるで墓の中のような。

簾の向こうにいる男は、急に胸を押さえると苦しみだした。
漆黒の肩で切り揃えた髪がさらさらと肩から落ちて顔に被さる。

どくりどくりと心の臓が脈打つ——自分の体の中にい
る化け物が全てを食らい尽くす音。この音が止まれば、自分はき
つと死ぬだろう。

だが、後もう少し——後もう少しで……自分の使命
がようやく終わる。

「三種の神器は、私の元に……一つに集まる——その
時……世界に変革が起こるのだ」

くくくと笑う。真っ白い顔に浮かぶは狂気の瞳

「小娘よ——……次ぎ会う時はこの黒椿が、貴様の
相手をしてやろう」

そう言うのと黒椿はぱたりと倒れた。漆黒の着物と髪が辺りに広がる。
男は、面を被っている。

真っ白な面——冷たい——無表情な人間の顔が模

つてある。

すると闇が、生きているように黒椿を包み込んだ。深い――
深い闇・・・・・・・・・・ずぶずぶと闇に飲み込まれていく。

黒椿は、深い――深い――闇へと消えた。

鉄格子の檻が、すべての自由を奪うように規律を守るように並んでいる。

天風は、ある牢屋の前で足を止めた。

そこには、不可思議な格好をした少年がいた。

少年は、天風を見つけると嬉しそうに声をかけてきた。

「やあ、天風――黒椿は？」

天風は、少年に笑みを向けると言った。

「主は、今日は此処には来ない。宮へ出かけているんだ」

そう天風がいうと少年は残念そうに項垂れた。

「心配するな・・もうすぐだよ」

もうすぐ――という言葉聞いて少年は呆然としたように顔を上げた。

「そうか・・長かった。やっと私は――死ぬことが出来る・・」

少年の淡々とした言葉に天風は、何の感情もない漆黒の瞳を少年に向けた。

しかし、顔にはしっかりと笑顔を貼り付けたまま言った。

「そうだね・・もうすぐだ――ミクニ・・」

そう——もうすぐ——もうすぐでこの卑しき命は終わ

りやっとな自分を許すことが出来る。惜しいとも思わない

——でも、何故だろう？胸がざわざわと波立つ。

夢か現か……あの少女の言葉が、やけに耳について仕方がない。

「出してあげる……逃げましょう、ここから……」

涙で潤んだ瞳が美しい。

逃げる——自分から進んでこの牢に入ったのに？

わたしの為に泣いてくれるあなたは誰？

名が——どうしても思い出せない。

思い出したいような思いだしたくないような……もどかしい……

・

あの影たちからは逃げられただろうか？

幻のように消えてしまった少女——そうだ……

その名は……

「まぼろ——」

胡蝶の声ではつとまぼろは振り向いた。胡蝶は、怪訝な顔をしている。

「何考えてんだよ・・・大丈夫か?・・・まぼろ・・・」

まぼろは、にこりと笑った。

「平気、ただ・・・朝日を見ていただけよ」

そうか――朝日か・・・そう言うのと胡蝶は、朝のすがすが

しい空気を吸いながら伸びをした。

まぼろは、大丈夫と胡蝶に言ってみたものの不安で胸が一杯だった。急がなければならない。何故だか、そう思う・・・今やることは、大帝に復讐することでもなく、王として三種の神器を見つけることではなく、ミクニを助けることなのだから・・・都に行けばきつと何もかもが上手くいく。

ミクニを助けてからそれからいろいろと考えればいい・・・病気なんかじゃなかった・・・きつと何か理由があって閉じ込められているんだ。

まぼろは、首飾りを取り出し日に当ててみた。きらきらと赤い石の光がまぼろの顔を照らした。

・第十八話（後書き）

これで、前半は終わりました。よく、分からない部分も多々ありますがよろしく願いします。只今話を強引に進めております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4850c/>

天孫降臨

2010年10月10日01時41分発行